

るのだから、即ち現在の戦争を國民戦争と説く間違つた説明を機因として、(その説に反對して)すべての國民戦争を否認するといふ誤謬が、種々の社會民主主義者の間に認められるから、吾人は茲にこの誤謬を少しく詳細に論ぜざるを得ない。

ユニウスが現在の戦争における『帝國主義的事情』の重大なる影響を力説してゐるのは至當である。即ち彼等はセルビアの背後にはロシアがあることを述べ、また例へばオランダの参戦は、第一にオランダは植民地を擁護するため、第二に帝國主義的國家聯合の一と同盟してゐるため、矢張り帝國主義的動機から發したものに相違ないと述べてゐる。それは疑ひもなく正當である！
—現在の戦争に關しては。しかしこの場合ユニウスも、第一に重要なものと見做してゐる事柄、即ち『社會民主主義政策を現在支配してゐる國民戦争といふ幻影』との闘争(ローザ・ルクセンブルグ・ユニウス著『社會民主主義の危機』新版、フツルス刊行、第八〇頁)を特に力説してゐるが、この結論は正當であり全く適切なものと認めなければならぬ。

たゞこの眞理を誇張して、具體的たれといふマルクス主義的要求から遠ざかり、現在の戦争に關する判断を、帝國主義時代において可能なるすべての戦争に移して、帝國主義に反對する民族

運動を閑却するとすれば間違ひである。こゝに『國民戦争はもはやあり得ない』といふ論策^{テリゼ}を擁護するための唯一の論據となつてゐるものは、世界が少數の『列強』の間に分配されてゐること、その結果あらゆる戦争は、初めは國民的戦争であつても、帝國主義國家または國家聯合中の一つの利害關係に觸れるところの帝國主義戦争と化するといふことである。

この論據の不當なることは明瞭である。マルクス主義辯證法の原則は、自然および歴史におけるすべてのものが制約され、可動的なものであるといふこと、或る條件の下に自己の反對物に轉化し得ない現象は只の、一つもない、といふことであるのは言ふまでもない。國民戦争は帝國主義戦争に轉化し得る、そしてその逆の場合もある。一例をあげれば、フランス大革命の戦争は國民戦争として始まつたし、また國民戦争であつた。この戦争は、反革命的王國の聯合に對する大革命の擁護といふ、×××戦争であつた。しかしナポレオンが、古くから成立してゐるところの、活力ある一連のヨーロッパ民族大國家を征服することによつて大フランス帝國を創立したときには、フランスの國民戦争から帝國主義戦争となり、この戦争はまた今度は再びナポレオンの帝國主義に對する國民解放戦争を誘致したのである。

帝國主義戦争と國民戦争との區別を、一は他に轉化し得るといふ論據で以て抹消せんと欲するのは、詭辯家のみの能くするところである。辯證法はギリシヤ哲學の歴史においても、詭辯法への喬度しとなつたことが稀れではなかつた。しかしながら吾人はどこまでも、一般にあらゆる轉化を否認することによつてどなく、その場合の契機を、その瞬間の状態においても、その契機の發展においても、具體的に解剖することを以て詭辯と戰ふところの辯證家なのである。

一九一四—一六年の帝國主義戦争が國民戦争に轉化することは極めて非蓋然的なことである。けだし進歩的發展を代表する階級は、客觀的にこの戦争をブルジョアジーに

×××××

てゐるプロレタリアートだからであり、それにまた兩國家聯合の勢力關係は何等異なるものではなく、國際的金融資本が至るところに反動的ブルジョアジーをつくり出してきたからである。しかしながら此くの如き轉化を不可能のものと説くことはできない。——ヨーロッパのプロレタリアートが今後二十年間も依然として無力であるとすれば、またこの戦争がナポレオンの場合の如き勝利を以て終り、一連の活動力ある民族國家の征服を以て局を結ぶとすれば、またヨーロッパ以外の帝國主義(第一番に　およびアメリカの)が今後二十年間も——社會主義に推移す

る(たとへば××戦争の結果)ことなしに——維持され得るとすれば、そういう場合はヨーロッパにおける一大國民戦争は可能であらう。そうなればヨーロッパにとつては數十年間を通じて逆轉を意味することにならう。しかしそういうことは蓋然的なことではない。とはいへ不可能なことではない。けだし世界歴史が往々後方に向つて大跳躍することなく、全く坦々として、まつしぐらに進歩するもの、ように想像するのは、辯證的でなく、科學的でなく、理論上正しくないからである。

更らに、植民地および半植民地側の國民戦争は、帝國主義の時期においては蓋然的であるのみならず不可避的である。半植民(支那、トルコ、ペルシヤ)には十億に達する人民が住んでゐる。即ち地球の全人口の半分以上である。民族解放運動はこゝでは既に強大であるか、乃至は次第に増大して發展に向つて成熟してゐる。如何なる戦争も別箇の手段を以てするところの政策の繼續である。植民地の民族解放政策の繼續として、帝國主義に對する國民戦争が避くべからざるものとなるだらう。かゝる戦争は現在の帝國主義『列強』の帝國主義戦争を誘導し得る。しかしそういう場合が始まらないこともあり得るし、始まるか始まらないかは幾多の事情によつて左右されるものである。

一例をあげれば、イギリスとフランスとは七年戦役で植民地のために戦つたことがある。即ちこの兩國は帝國主義戦争を行つたのである。(帝國主義戦争は奴隷支配の土臺においても、原始的資本主義の土臺においても、今日の高度に發展せる資本主義の土臺においても可能である。)フランスは敗けて植民地の一部を失つた。それから數年後にイギリス一國に對する北アメリカ諸州の民族解放戦争が始まつた。フランスとスペインとはまだ現在の合衆國の一部を所有してゐたが、イギリスに對する敵對關係から、言ひかへれば自己の帝國主義的利益關係に従つて、イギリスに向つて立つた諸州と友誼的協約を結んだ。フランス軍はアメリカ人と共同してイギリス人を撃つた。この場合は即ち民族解放戦争であつて、帝國主義的角逐は何等重大な意義を有しない要素として現はれてゐる——恰かも一九一四—一六年戦争に見るものと正反對である(オーストリア・セルビア戦争における民族的要素は、一切のものを左右する帝國主義的角逐に比して、何等特殊の重要性を有してゐない。)これによつて帝國主義なる概念を全然干偏一律に適用して、この概念から國民戦争の『不可能』を引き出すが如きは、如何に没分曉のことであるかゞ分かる。何等かの帝國主義諸國に對する或る聯盟——たとへばベルシヤ、インド、支那がそれに加つてゐるとして

——の民族解放戦争は全然可能であり、且つ蓋然的である。けだしこの聯盟は右の諸國の民族解放運動から生じたものだからである。但しこの場合この戦争が現在の帝國主義國家間の帝國主義戦争に轉化するか否かは、極めて數多くの具體的事情によつて左右されることであつて、この轉化が必ず始まると保證するのは笑ふべきことであらう。

第三に、帝國主義の時期におけるヨーロッパには、國民戦争を不可能とは決して見做され得ない。『帝國主義の時期』は現在の戦争を帝國主義戦争たらしめた。この時期は不可避的に(社會主義に移らない限りは)新たな帝國主義戦争を惹起するだらう。この時期は現在の列強の政策を、徹頭徹尾帝國主義政策たらしめた。しかしながらこの『時期』は國民戦争——たとへば帝國主義強國に對する小國(たとへば併合された、乃至は民族的に抑壓されてゐる國)の——を決して排除するものでなく、またヨーロッパ東部における大規模なる民族運動を排除するものでもない。オーストリアに關してはユニウスは極めて健全なる判断を示し、經濟上の關係のみならずこの國の獨特の政治上の關係をも考慮に入れて、『オーストリアの内部的な生活能力』を説き、『ハプスブルグ王制はブルジョア國家の政治的組織でなく、社會的寄生者の二三の徒黨の力弱いシンチケート』である

ことを認め、『オーストリア・ハンガリアの掃蕩は、歴史的にはトルコの瓦解の繼續であり、それに伴つて歴史的発展道程の要求である』ことを認めてゐる。若干のバルカン諸國やロシアの場合でもそれ以上に出ない。そしてこの戦争で列強が著しく疲弊した場合、乃至はまたロシアに革命が勝利を得た場合には、國民戦争——しかもその戦争の勝利さへも全く可能である。一面においては、この場合帝國主義國家の干渉は、實際上には如何なる事情の下においても實現され得ない。しかし他面においては、『巨國』に對する小國の戦争は勝算がないといふ風に、『無造作に』判斷を下す人があるとすれば、勝算のない戦争も矢張り戦争であるといふことを注意しなければならぬ。それに、『巨國』内部の或る一定の現象、たとへば革命の開始は、見込みのない戦争を極度に多望な戦争に變化させ得るのである。

『國民戦争はもはやあり得ない』といふ主張の不當なることをこんなに長々と説いたのは、この主張が理論上間違つてゐるためばかりでない。第三インターナショナルの創立が俗流化されないマルクス主義を土臺にしてのみ可能である時代において、『左翼』がマルクス主義の理論に對して、此くの如き無分別を示したとすれば、言ふまでもなく深く悲しむべきことであらう。然るに實際上

政治上の點においても、この過誤は極めて有害なものである。即ちかゝる過誤からは、明かに反動的戦争以外のものは存在し得ないといふ理由で『軍備撤廢』といふ没分曉な宣傳が出てくるし、また民族運動に對する、なほ一層没分曉な、直接反動的な無關心が出てくるのである。ヨーロッパの『大』國民の一員、即ち弱小國民や植民地國民の大衆を抑壓してゐる國民の一員が、尤もらしい見識のある顔付を以て、『國民戦争はもはやあり得ない！』と説くときは、右の無關心は排外主義となるのである。帝國主義國家に對する國民戦争は可能であり、蓋然的であるのみでなく、不可的避であり、 $x \times x \times x \times x \times x \times x \times x \times x \times x$ 。尤もこの戦争が成功するためには、被抑壓諸國の住民のどれくらい人數(前に挙げた例のインドと支那とでいへば數百萬人)の努力の糾合か、乃至は國際的地位における特殊の好都合な狀況(たとへば疲弊や戦争や内部的對抗等の結果、帝國主義諸國家の干渉が麻痺せる場合)か、乃至は強大國の一つにおけるプロレタリアートの對ブルジョ

ジー××(これは吾人の列強には最後になつてゐるが、プロレタリアートの勝利にとつて望ましい且つ有利だといふ視點からすれば第一に位するものである)がそれと同時に起きるか、そのいづれかゞ必要である。

することであり、戦争の繼續中議會の常設を力強く要求して、議會による政府の統制と、國民による議會の統制とを確保して益々これを強めることであり、自由なる國民のみが自己の國を眞に能く擁護し得るが故にすべての政治的公權剝奪の即時撤廢を要望することであり、最後に、オーストリアおよびトルコの維持、即ちヨーロッパおよびドイツにおける反動派の維持を目的とする帝國主義的な戦争綱領に對して、一八四八年の愛國者および民主主義者の眞の愛國的な舊綱領、即ちマルクス、エンゲルス、拉萨ールの綱領たる、統一大ドイツ民族共和制といふ標語を對向させることであつた。これが國にかゝげらるべき旗印であつて、この旗印こそ眞に國民的な、眞に自由的なものであり、ドイツの最良の傳統とも、プロレタリアートの國際的階級政策とも合致せるものである。(前掲書、第八七、第八八頁。)

『されば祖國の利害關係とプロレタリアートの國際的連帶との六ヶしいディレンマ、わが議員團をして『重い胸を抱へて』帝國主義戦争の味方に赴かしめたところの悲劇的矛盾は、その實純粹の想像であり、ブルジョアの國民主義的架空談である。國の利害とプロレタリア・インタナショナルの階級的利害との間には、戦争の場合も平和の場合も、むしろ完全な調和が存してゐる。即ち兩方

とも階級闘争の最も活潑な發展と、社會民主主義綱領の最も力強い主張とを必要とするものである。(前掲書、第八九頁。)

このようにユニウスは立論してゐる。しかしながら彼れの立論の誤謬であることは一目瞭然である。そしてわが中央派の公然および陰然たる幫間ども、即ちカウツキーとチヘンケリー兩氏、それに加ふるに多分マルトフとチヘイゼ兩氏が、痛快の念を以てユニウスのこの言葉を固執し、しかも理論的に當を得てゐると考へるのでなく、うまくこじつけて、何喰はぬ顔をして労働者を欺くことだけを目論んでゐるのだから、吾人は茲にユニウスの過誤の理論的起源を、もつと詳細に論ずる必要に迫られてゐるのを感じる。

ユニウスは帝國主義戦争に國民的綱領を『對向』させよといふ提議をしてゐる。指導的階級に對して、未來でなく過去に向へといふ提議をしてゐるのだ！一七九三年と一八四八年には、フランスにおいてもドイツにおいても、また全ヨーロッパにおいても、客觀的には、ブルジョア民主主義的革命が當面の問題とされてゐた。一七九三年にはブルジョアジーおよび民衆の革命分子によつて實現され、一八四八年にはマルクスによつて民主主義の名において表示されたところの、當

時の民主主義の『真に國民的』な、即ち國民的ブルジョア的な綱領は、右の客觀的な歴史的事情に適應したものであつた。當時は封建的王朝的戦争に對して、客觀的には、 $\times \times \times$ 民主主義的戦争、國民的解放戦争が對置された。これがその時期の歴史的任務の内容であつた。

ヨーロッパの主導的な最大の諸國家にとつては、今は客觀的事情は全然別なものである。前進的發展——可能的背進を眼中において——は、社會主義社會、 $\times \times \times \times \times$ の方向に向つてのみ可能である。帝國主義的ブルジョアの戦争、高度に發達せる資本主義の戦争に對しては、客觀的には、主導的階級の見地、前進的發展の見地からすれば、ブルジョアに對する戦争、即ち $\times \times$ のためのプロレタリアートとブルジョアとの $\times \times$ ——この戦争がなければ著しい前進的發展は全くあり得ない———といふ戦争のみが對立し得るのである。そして然る後に——しかし或る特別の條件の下においてのみ—— $\times \times$ のである。右の理由から、ロシアにおける $\times \times \times \times \times$ および共和國の勝利といふ條件の下に、祖國を擁護するといふ立場を取らうとしたポリセヴィキ（幸ひにそといふポリセヴィキは極くバラバラのものであつて、吾々から立ちどころに捨てられた）は、ポリセヴィズムの文字にだけ忠實な

であつて、ポリセヴィズムの精神を抛棄せるものであつた。ロシアがヨーロッパ主導諸國の帝國主義戦争に引き入れられたとしたら、共和國としても矢張り帝國主義戦争を行つたに相違ない。

階級闘争は侵略に對抗する最良の手段だとユニウスが言つてゐる場合、ユニウスはマルクス主義辯證法を半分だけ適用し、正しい道に一歩進んで、すぐさま再びそこから廻れ右をしてゐる。

マルクスの辯證法は、各特定の歴史的局面的具體的解剖を要求するものである。階級闘争は侵略に對抗する最良の手段だ——これは正しい、聯邦主義を倒すブルジョアに對しても、ブルジョアを倒すプロレタリアートに對しても。しかしながら右の主張は、あらゆる階級抑壓に當てはまるものであるといふ、取りも直さずその理由から、その主張は餘りに一般的であつて、與へられた特別の場合に對しては不充足である。ブルジョアに對する $\times \times$ は矢張り階級闘争の形態の一であつて、この階級闘争の種類のみが、ヨーロッパ（一國だけでなくヨーロッパ全體）を侵略の危険から解放するだらう。『大ドイツ民族共和國』が一九一四—一六年の間に存立してゐたとしたら、矢張りこいふ帝國主義戦争を行つたに相違ない。

ユニウスはこの問題に對する正しい答へと、社會主義のためのブルジョアに對する $\times \times$ とい

ふ正しい標語とに、極く傍まで近寄りながら、眞理を言ひ切つてしまふのを怖れるかのように向轉換をして、一九一四年、一九一五年、一九一六年における「國民戦争」といふ幻想にまで後退した。この問題を理論的方面からでなく實際的方面から考察しても、ユニウスが犯した過誤は矢張りそれと劣らず明瞭に現はれてくる。ドイツの全社會、農民をも含めてのすべての階級が、戦争に賛成であつた。(ロシアの場合でも恐らく同一であつた——少くとも多數の富農および中農と、土地のない農民中の著しい部分とはXXXXXXX、XXXXXXX、XXXXXXX、XXXXXXX、XXXXXXX)の先の先から爪先きまで武装した。こういう事態の下にあつて、XXXX、XXXX、XXXX、XXXX、XXXX、XXXX、XXXX、XXXXをを含む綱領を『弘布』することは——實際上には、XXXXを『弘布』することを意味するに相違ない(しかも間違つたXXXX綱領を以て!)

ユニウスがこの場合XXXXは『作爲』され得ないと言つてゐるのは至當である。一九一四—一六年にはXXXXが當面の問題となり、戦争の胎内にひそみ、戦争から生れ出つゝあつた。これをXXXX階級の名において『弘布』して、戦争の時期にあつては徹底反動的な、XXXX的な、民衆に未曾有の苦闘を負はせつゝあるブルジョア階級に對 　XXXX　、社會主義は實現され得ないとい

ふ綱領を、徹底的に怖るゝところなく指し示すべきであつた。發展に向つて成熟しつゝあるXXXXの線上に添ふところの、そしてXXXX危機のどんな發展速度の場合にも疑ひもなく實現され得るところの、系統的な、徹底的且つ實際的な行動を考量すべきであつた。こういう行動については、わが黨の決議は次ぎの事柄に言及してゐる。一、XXXX　、二、『XXXX』の精神の打破、三、XXXXの創立、四、　XXXX、五、あらゆるXXXXXXX支持。すべてこれらの一歩一歩の成功は猶豫なくXXXX導くものである。

一大歴史的綱領の弘布は疑ひもなく巨大な意義を有する——しかしそれは一九一四—一六年にとつては既に時代おくれとなつた舊時の國民的ドイツ的綱領の弘布でなく、プロレタリア的國際的な、社會主義的綱領の弘布たるべきである。ブルジョアたる諸君は掠奪のため戦争を行ふし、吾々すべての交戦國の労働者は諸君にXXXXXXXする、社會主義のためのXXXXを——これが一九一四年八月四日に、社會主義者が議會において主張すべきであつたところの、演說の内容である。レーギエン、ダヴィド、カウツキー、プレハノフ、ゲード、ザンパーその他の如く、プロレタリアートに對して裏切りを行はない社會主義者だつたなら、そう主張すべきであつた。

最良の擁護とは民軍、常設議會等のことである。ひとたびこれを採用すれば、此くの如き綱領は全くひとりでに次ぎの段階に、即ち××××に導くに相違ないと。

この種の考察が意識的にか無意識的にかユニウスの戦術を規定してゐるらしい。かゝる考へ方が間違つたものであることは論ずるまでもない。××組織の中に何等僚友を有することなく、××標語を論理的に終局まで考へ、大衆をその標語の精神において教育するところの、單獨の個人を、吾々はユニウス・プロシユールの中に認める。しかしながら此くの如き缺點は——これを忘れるのは當を得ない——ユニウスの個人的缺點ではなく、四方八方からカウツキー式虚偽、ひとりよがり、日和見主義者に對する『平和愛』の十重廿重の網の中にひろがつてゐるところの、すべてのドイツ左翼の弱點の成果である。ユニウスの追隨者は散在してゐるに拘らず、×××小冊子とリーフレットとの發行を始め、カウツキー主義に對する闘争に着手することを能くした。彼れ等は今後も引續きこの正道を進むことを理解してゐるであらう。

『軍備撤廢』の標語について

一九一六年十月。(『ソチアル・デモクラット』合集第二號所載。)

これは世間離れのした理論だと言ふ人間があれば、吾々はその人間に對して二つの世界的事實を思ひ出させたい。一はトラストの役割と婦人の工場労働、他は一八七一年のパリ・コンミュンとロシアにおける一九〇五年の十二月暴動である。

トラストを發展させ、小兒と婦人を工場に狩り立て、そこで破滅させ、膏血を絞り、極度の窮迫に運命づけることは、 XX 『 XXX 』 XXX ある。吾々はかゝる發展を『要求』するものでなく、これを『支持』するものでなく、却つて此くの如き發展と戦ふものである。しかし如何にして戦ふのか？、トラストと婦人の工場労働とは一つの進歩であることを吾々は知つてゐる。吾々は後退りすることを欲しない。手工業に、獨占的地位を伴はざる資本主義に、婦人の家内労働に逆轉することを欲しない。トラストその他の中を突き進み、それを超えて

へ！

發展の客觀的成行きを考慮に入れてゐる此の考察は、相當の變更を加へて現在の國民の軍隊化にも適用される。今日帝國主義ブルジョアジーは全國民のみならず青年をも軍隊化してゐる。明日になればおそらく婦人の軍隊化にまで歩を進めてゐるだらう。吾々はこの場合は、たゞ次ぎの如く言ひ得るのみである。そうならばそれだけ宜しい！ 物事が進めば進むほど宜しい！ そして

物事が進んで行けば行くほど、それだけ吾々は資本主義に對する XXX に近寄つてくるのだ！ 社會民主主義者にしてコンミュンの實例を忘却しないならば、如何にして XXX を以て嚇かされよう？、これは何等『世間離れのした』理論でも、夢想でもなく、一つの事實である。そして帝國主義時期と帝國主義戦争とは、不可避免的に此くの如き事實を誘致しなければならぬといふことを、あらゆる經濟上および政治上の事實に逆つて社會民主主義者が疑ひ出したとすればトデモお話にならぬことである。

パリ・コンミュンの或るブルジョア的目撃者は、一八七一年五月にイギリスの新聞に次ぎの如く記した。『もしもフランス國民が婦人よりのみ成り立つてゐたとすれば、如何に怖い國民だつたらう！』婦人と十三歳以上の少年とはコンミュンの時に男子の側で戦つた。將來ブルジョアジー XXX ・ XXX ・ XXX においても、 XX ならざるを得ない。プロレタリア婦人は XXX ・ XXX ・ブルジョアジーが、 XXX ・ XXX ・ XXX ・ XXX ・ XXX ・ XXX ・プロレタリアートを XX するのを、たゞ手出しせずには眺めはしないだらう。婦人は——一八七一年の場合がそうだったように—— XXX ・ XX るだらう、そして現在嚇かされてゐる國民——正確に言へば、 XX よりも日和見主義者によつて解體させられて

争——これは空虚な文句またはイカサマに外ならぬ。チンマイワルトおよびキエンタール會議の主要缺陷の一つ、第三インタナショナルの胚芽たるべかりしものゝ失敗の根本原因の一つは、取りも直さず次ぎの點に存する。即ち對日和見主義鬭争の問題に對して、日和見主義者との絶縁の必要といふ意味に決定を與へることは愚か、一般にこの問題が會議に一度も公然と提出されなかつた點にある。日和見主義はヨーロッパの運動の内部において——暫時の間——勝利を得た。すべての大國に日和見主義の二つの類別が形成された。一は、卒直な、ブッキラ棒な、従つて比較的危険でない帝國主義的社會主義、即ちブレハノフ、シャイデマン、レーギエン、アルペール・トーマ、ザンバー、ヴァンデルヴェルド、ハインドマン、ヘンダソン等の諸君。二は、陰密のカウツキー流の帝國主義的社會主義、即ちドイツではカウツキー、ハーゼ並びに『社會民主労働共同團』、フランスではロンゲー、プレスマン、マイラスその他、イギリスではラムゼー・マクドナルドその他、『獨立労働黨』の指導者、ロシアではマルトフ、チヘイゼその他、イタリアではトレヴェスその他謂はゆる左翼改良主義者。

卒直な日和見主義は自由且つ公然にXXに反對し、始まりつゝあるXX運動とXX勃發とに反

對し、内閣参加から戰時工業委員會参加にいたるまでその形は色々あるが、XXと公然たる同盟を結んできた。陰密の日和見主義者、即ちカウツキー主義者はXXとの妥協の擁護を、耳ざわりのよい、如何にも『マルクス主義的』な言葉と平和主義的の言葉とのかけに陰蔽するが故に、労働者運動にとつて遙かに有害であり、危険である。支配的日和見主義のこの兩形態に對する鬭争は、プロレタリア政策のあらゆる分野において行はれねばならぬ——議會や組合やストライキやXX等において。

いま支配的日和見主義の兩形態を特色づけてゐる主要特質は何處に存するか？

現在の戦争とXXとの相互關係、その他XXに關する具體的問題が、緘黙され、隱蔽されてゐるか、乃至は警察の禁止を名として議論を差控えられてゐる點にある。しかも——戦前には、この來るべき戦争とプロレタリアXXとの相互關係が、無数の度數において非公式に、且つパーゼル宣言では公式に論ぜられてゐたにも拘らず、現在はそういふことが行はれてゐるのである。

軍備撤廢の主要誤謬は、この場合XXのすべての具體的問題が回避されてゐる點にある。それとも軍備撤廢論者はXXなしの革命といふ全く新しい種類のものを主張するのか？

且つまた、吾人は決して改良のための鬭争に反対なのではない。大衆の間に激動が數限りなく勃發し、

してゐるにも拘らず、また吾々の努力にも拘らずこの戦争××××、×××

とすれば、人類は——最悪の場合として——將來なほもう一つ帝國主義戦争を鬧みする××××××××あることを吾々は無視したくない。吾人は日和見主義者にも反対するところの、改良の綱領の信奉者である。日和見主義者にだけ改良のための鬭争を委ねて、吾人は悲しむべき現實から逃走して、『軍備撤廢』といふような雲烟に包まれた遠くの方に赴けば、日和見主義は只もう喜ぶことだらう。『軍備撤廢』こそは醜惡なる現實からの逃走であつて、それに對する鬭争では毛頭ない。

因みに、問題の提出、たとへば祖國擁護といふ問題の提出の場合の主要欠陥の一は、若干の左翼の場合にあつては、これに對する解答が具體的であることが不充分だといふ點に存する。『あらゆる』祖國擁護に對して『一般的』論策^{テーゼ}を提出する代りに、現在の帝國主義戦争においては祖國

擁護はブルジョアの

であると言ふ方が、理論的には遙かに正當だし、實際的には比較すべからざるほど重要である。前者は正しくない、そして労働者黨内部の労働者の當面の敵たる日和見主義者にも『觸れ』てゐない。

××問題については、具體的な且つ實際上必要な解答を作成するに當つては、吾々はブルジョアの××に賛成でなく、プロレタリア的××にのみ賛成だと言はなければならぬ。それ故に合衆國やスミス、ノルウェー等の如き國においてすらも、常備軍に對してのみならずブルジョアの民軍に對しても、『一文の金も、一人の人間も』××××と言ふべきである。しかも最も自由な共和國（たとへばスミス）においても、民軍のプロシヤ化が行はれ、同盟罷業者に對して出動させる目的で民軍の御用化が行はれてゐるのを見るのだから、益々その必要がある。吾々は次ぎの如き要求を提出することができる、××××××、××××の撤廢、外國労働者と内地労働者との同權（これはスキスの如く、外國労働者を益々厚顔無恥に擯取し、これに權利を與へないでおく帝國主義國家においては、特に重要な條項である）、更らに、一國の住民たとへば百人毎に、教練者の自由撰擇と、教練者の仕事に對する國庫支拂とを以てする、軍事研究のための自由團體を創立する權

利を與ふること等。かゝる條件の下にのみプロレタリアートは奴隷主のためでなく、自分自身のために、××××ぶことができよう、そしてプロレタリアートの利益は、疑ひもなくかゝる研究を必要とする。××××のあらゆる成功、そしてまた例へば或る一都市、或る一工場地域、××××××××××の如き部分的成功ですらも、勝利を得たるプロレタリアートを驅つて、否認なしに、此くの如き綱領を實現させるものであることは、ロシア革命が示した通りである。

最後に、日和見主義に對しては單に綱領を以てのみ戦ふべきでなく、言ふまでもなくこの綱領を實現することに、撓ゆまず注意を拂ふことによつて戦ふべきである。破産するに至つた第二インターナショナルの最大の致命的過誤は、言葉に行爲が合致しなかつたこと、良心なき革命的文句の習慣が養はれてゐたことであつた（バーゼル宣言に對するカウツキー一味の現在の態度を見よ）。この方面から軍備撤廢の要求に近付くとすれば、何よりもまづ軍備撤廢の客觀的意義の問題を提起しなければならぬ。

社會的理念としての軍備撤廢——即ち、或る種の社會的狀態にその發生の起源を有し、個々のまたは一個のサークルの出來心たるだけでなく、或る種の社會的サークルに對して勢力を有し得

るものとして——は、久しい間鬭争の血腥い進路から遠ざかつて居り、且つまた引きつゞき遠ざかつて居られるように希望してゐる個々の小國の、例外的に『安泰』な特殊の生活條件によつて生じたものである。成る程そうだと思ふためには、ノルウェーの軍備撤廢論者の議論の立て方を調べて見ればよい。曰く、『吾々の國は小國だ、吾々の軍隊は小さい、吾々は強國に對しては手も足も出ない』（そのために彼れ等は、強國のどつち側かの集團と帝國主義的同盟を結ぶことを強要されるのに對しても、同じく無力なのだ！）『吾々は今後も矢張り靜かに田舎町に留まつてゐて、田舎町政治を營み、軍備撤廢や強制仲裁裁判や永久中立などを要求してゐたい』（『永久』中立——おそらくはベルギー流の？）。

いつまでも遠ざかつてゐたいといふ小國のケチくさい努力、世界歴史の大戦闘から只々遠ざかつてゐて、その相對的な獨占的地位を利用して化石的受け身の態度を固執してゐたいといふブルジョアの希望——客觀的に見れば、これこそ軍備撤廢觀念に對して、或る程度の成功と、若干の小國における或る程度の普及とを保證し得るところの事情なのである。この努力は反動的なものであつて幻想に基いてゐるものであることが分る。けだし何と言つても帝國主義は、小國を何

等かの方法において世界經濟と世界政策との渦巻の中に引き込むものだからである。

これをスキスの例を以て説明したい。帝國主義的事情はスキスに對して——客觀的に見れば——労働者運動における二つの方針を押しつけてゐる。一方では日和見主義者はブルジョアジーと同盟を結ぶことにつとめ、スキスを共和的民主的な獨占的聯邦たらしめて、帝國主義ブルジョアジーの慢遊客に奉仕させ、その『安泰』な獨占的地位を益々利殖的に、益々安樂に利用し得るようにすることに努力する。實際上にはこの政策は、特權的地位にある小國の特權的労働者の小層を、プロレタリアートの大衆に對して、その國のブルジョアジーと同盟させる政策である。他方ではスキスの眞の社會民主主義者は、スキスの比較的自由的な状態やその『國際的』地位（最高の文化を有する諸國と隣接してゐること）や、スキスが仕合せにも『自分自身の獨立の』言葉でなく三つの世界的言葉を用ゐてゐる事情を利用して、全ヨーロッパのプロレタリアートの×××分子の×××團結を擴張し、鞏固にし、力強くすることに努める。ブルジョアを扶けて今後この上なく安泰な商業とアルプスの美とを獨占し得る地位にとゞまつてゐようではないか、そうすれば多分吾々の手にも數ベンニヒの金がこぼれ落ちてくるだらう——客觀的に見てこれがスキス日和見主

義者の政策の内容である。フランス、ドイツ、イタリア人の間の×××プロレタリア

ブルジョアジー××××××××——これがスキスの×××社會民主主義者の政策の客觀的内容である。遺憾ながらこの政策はスキスの『左翼』によつて、まだ極く不充分にしか實行されてをらず、また一九一五年アールラウにおける黨大會の立派な決議(×××大衆闘争の承認)は、今のところまだ紙上にとゞまつてゐる。だが茲ではこのことを問題にしてゐるのではない。

吾人の關心する問題は次ぎの如き問題である。曰く、軍備撤廢の要求はスキス社會民主主義者間の×××的傾向に相應はしいものであるか否か。明らかに相應はしくないものである。客觀的に見れば軍備撤廢の『要求』は、日和見主義的な、偏狹國民主義的な、小國の視野によつて制限されてゐるところの、労働者運動の方向に相應するものである。客觀的に見れば、『軍備撤廢』なるものは小國の最も國民的な、特殊に國民的な綱領であつて、國際的社會民主主義の國際的綱領では決してない。

附言。日和見主義的『獨立労働黨』機關紙たる、イギリスの雑誌『ソーシャリスト・レビュー』最近號(一九一六年九月)の第二八七頁には、この黨のニューキャッスル會議の決議が載つてゐる。この

戦争は『名目上』は防禦戦争であらうとも、如何なる政府の如何なる戦争の支持をも、××せよと。そして第二〇五頁の社説には次ぎの如き聲明がしてある、『吾人はシン・フェン（アイルランド獨立主義者）の暴動を是認しない』（一九一六年アイルランドにおける暴動のこと）『吾人は一般に軍國主義および戦争の如何なる形態をも是認しないと同じく、一般に武装的暴動を是認しない。』小國でなく強大國における此くの如き『反軍國主義者』、此くの如き軍備撤廢論者は、最悪の日和見主義者であるといふことを、茲に立證する必要があるだらうか？ それにも拘らず彼れ等が××××をも、軍國主義および戦争の『形態の一つ』と見做してゐることは、理論上全く正當なことなのである。

日和見主義と第二インターナショナルの崩壊

（レーニンおよびトロツキー論文集『戦争と革命』チュートリヒ、一九一八年刊より。）

第二インタナショナルは本統に崩壊してゐるだらうか？ カウツキーやヴァンデルヴェルドの如き、第二インタナショナルの最も名聲ある代表者は、それを頑強に否認してゐる。結合が切斷されたなどといふことはない、すべてが秩序整然としてゐる。これが彼れ等の見地である。

真相を見出すために一九一二年のバーゼル大會の決議を顧みたいと思ふ。これは取りも直さず今の帝國主義世界戦争に關聯せるものであつて、世界のすべての社會主義黨によつて受け容れられたものである。如何なる社會主義者と雖も、あらゆる戦争を具體的歴史的に評價することが必要だといふことを、理論上敢て否認するものがないのは注意すべき點である。

戦争が勃發した今日、公然たる日和見主義者並びにカウツキー主義者は、バーゼル宣言を否認することや、戦争中における社會主義諸黨の態度をこの宣言に照して検討することを敢てするだらうか？ 何故にそうしないのか？ この宣言は一人一人の正體を完全に暴露するものだからである。

この宣言は祖國擁護についても、攻撃戰・防禦戰との區別についても、何等遺言をしてゐないし、また今日ドイツおよび三國協商の日和見主義者とカウツキー主義者とが、すべて町角に立つて世間に向つて吹き立てゝゐる事柄について、何等の言葉をも残してゐない。この宣言はそういう事柄について述べることはできなかつた。けだし宣言の語つてゐる事柄は、そういう概念の應用を絶対に排除するものだからである。宣言はこの戦争を數十年間に亘つて準備したところの、そして一九一四年に戦争を招致したところの、一連の經濟的および政治的抗争——一九一二年には十分に且つ明確に發露してゐた——を具體的に擧げてゐる。即ち宣言は『バルカンに對する優先權』のためのオーストリア・ロシアの抗争や、『近東における侵略政策』のための『イギリス、フランス、ドイツ』の（この諸國のすべての！）抗争や、アルバニアにおける『支配欲』に關するオーストリア・イタリアの抗争等を擧げてゐる。宣言はすべてこれらの抗争の特徴を、『資本主義的帝國主義』を土臺とする抗争といふ一言で以て要約してゐる。かくの如く宣言は現在の戦争の侵略的、帝國主義的、反動的、奴隸化的性質を火の如く明らかに認めてゐるのであつて、この性質は祖國擁護の認容を理論上には不條理のものたらしめ、實際上には笑ふべきものたらしむ

るものである。他の『祖國』を併呑するために巨大な鯨魚が互ひに争つてゐるのである。宣言は争ふべからざる歴史的事實から、避くべからざる結論を引き出して曰く、その戦争は『國民の利益といふ事實を以てしても決して是認され』得ないものである、それは『資本家の利潤、××の功名心のために』用意されるものである。労働者が『互ひに×××××』としたら『犯罪』である。こう宣言は語つてゐる。

*ドイツにおけるカウツキーの個人的追隨者を指して言ふのでなく、日見主義と急進主義との間を右往左往して、實際上では日和見主義の正體を隠蔽するための御用をつとめてゐる外見的マルクス主義者の國際的な型を指すものである。

資本主義的帝國主義の時期は、成熟し爛熟せる資本主義の時期であつて、この資本主義は崩壊に當面し、社會主義に座をゆづるに充分に熟し切つてゐる。一七八九年から一九七一年までの時期は進歩的資本主義の時期であつて、その時期には、封建主義、專制主義の抑壓と他國の束縛からの脱却とが當面の歴史的任務となつてゐた。こゝにいふ土臺の上において、そしてこゝにいふ土臺の上においてのみ、『祖國擁護』は認容されるものであつた。即ち抑壓に對する防衛の意である。

帝國主義強國に對抗する鬭争においては、この概念は現在と雖も適用され得ようが、帝國主義強國同志の戦争、即ち何人がバルカン諸國や小アジア等を他國よりもヨリ多く掠奪し得るかといふことを中心とする戦争に、右の概念を適用することは不條理である。それ故に、この今の戦争に『祖國擁護』を認めてゐる『社會主義者』が、盗人が盗んだことのある場所を避けて通るように、パーゼル宣言を回避してゐるのは怪しむに足りない。『自國』のブルジョアを扶けて他國を掠奪させ、他國民を束縛させる人間は排外社會主義者である、即ち言葉の上では社會主義者で、實際の上では排外主義者だといふことを、パーゼル宣言は立證してゐるのである。『自己の祖國の行動が他の祖國の束縛を目宛てにしてゐる場合でも、祖國を擁護するといふのが、取りも直さず排外主義の概念における本質的な點である。

戦争を國民解放戦争と認めれば或る戦術が出てくるし、それを帝國主義戦争と認めれば別な戦術が出てくる。パーゼル宣言はこの後者の戦術を明瞭に擧げてゐる。×××××××××××××××××

×××

××××××××。×××××××××××××××××。そのための歴史的條件がまだ成熟してゐない場合は發展を促進することはできぬ。宣言は説いて曰く、××××××は可能である、その先要條件は成熟してゐる、それは取りも直さず戦争と
はれる。『支配階級』は『世界戦争に』 ××
××××××××に對して』
抱いてゐる——パリ・コンミュンと一九〇五年革命の實例、即ち大衆罷業と××の實例を引證して宣言はそう説いてゐる。カウツキーの如く、この戦争に對する社會主義の關係は解明されなかつたと主張するのは虚偽である。この問題はバーゼルにおいて討論されたのみならず、解決されて、プロレタリア的××××大衆闘争の戦術がこの大會で採用されたのである。

バーゼル宣言の全部またはその本質的部分を回避して、その代りに、第一にバーゼル大會以前に行はれたところの、第二に全世界の黨の決定を代表するものでないところの、第三に取りも直さず今の場合の戦争でなく種々のあり得べき戦争を取扱つてゐるところの、そういう箇々の黨の指導者の言説や決議文を引用するのは、途方もない間違ひである。問題の核心は、ヨーロッパ強國間の國民戦争の時期が、同じく右強國間の帝國主義戦争の時期に變つたといふ點、そしてバーゼ

ル宣言はこの事實を最初に公式に認めたといふ點に存する。

バーゼル宣言はそんな風に評價され得るものでなく、祝祭日の宣言であり誇張的な威嚇だつたと見做すものがあれば誤りである。この宣言によつて化けの皮を剥がれる人間は、そういう風に考へたがる。しかしそれは間違ひである。バーゼル宣言は第二インタナショナルの全時期の偉大なる宣傳的仕事の成果に外ならず、社會主義者があらゆる國語を以て、幾萬となき演説や論説や激文で大衆に向つて投げて來たものゝ總括に外ならぬ。その例として、一八九九年にジョール・ゲードが戦争の場合における入閣主義を痛罵した時の言葉を挙げれば足りる。彼れは『資本家的盜賊團』によつて目論まれる戦争と言つてゐる（“En garde” 第一七五頁）。それからカウツキーは一九〇八年に『權力への道』の中に、『平和的』時期が終り戦争および革命の時期が始まつたことを認めた。バーゼル宣言を空文句または誤謬と目することは、最近二十五年間の社會主義者の仕事全體を空文句または誤謬と目することを意味する。日和見主義者とカウツキー主義者とはバーゼル宣言の要求と、これを現在の戦争に適用しないことゝの間に存する矛盾を認めたらぬ。けだしこの矛盾は第二インタナショナルそのものゝ仕事における深刻な矛盾を暴露するもの

だからである。一八七一年から一九一四年までの時期の比較的『平和的』な性質は、日和見主義を初めは気分として、次いで傾向として、最後に労働官僚および小ブルジョアの随伴者の集團または層として養つてきた。これらの分子は×××目標と×××戦術とを言葉の上で認めることによつてのみ、労働者運動を支配することができた。そして『平和的』仕事はすべてプロレタリア××の準備に外ならないと誓ふことによつてのみ、大衆の間に信頼を贏ち得たのである。この矛盾は一度は切開されねばならぬ腫物であつた、そして今や切開された。そこで問題全體は次ぎの點に存する、即ち膿汁を——カウツキー一味が試みてゐるように——再びもとの肉體の中に押し込めるか——『協同一致』(膿汁との)のために、——それとも労働者運動といふ肉體を完全な健康に導くために、一時の疼痛を忍んでこの膿汁を手取り早く奇麗サッパリと除いてしまふかである。

一九一四年—一五年に××、
たり、入閣したり、××
念を辯護したりした人々
が社會主義を裏切つたことは明白である。この事實を否認し得るものは嘘つきだけである。この事實を茲に解明する必要がある。

二

問題全體を一個の個人的問題と解する者があるとすれば笑ふべきである。ブレハノフやゲードの如き人々が云々する場合の日和見主義と何の關係があらう?——とカウツキーが質問する(『ノイエ・ツァイト』一九一五年五月十八日)。カウツキーが云々する場合の日和見主義と何の關係があらう?——とアクセルロッドが三國協商側の日和見主義者を代表して答へた(『社會民主主義の危機』チューリヒ、一九一五年刊、第二二頁)。これは喜劇である。全運動の危機を説明するには、第一にその場合の政策の經濟的意義、第二にその政策の基礎的觀念、第三にその政策と社會主義における諸流派の歴史との相互關係を検討する必要がある。

一九一四—一五年の戦争中における『祖國擁護』の經濟的本質は何であるか? すべて、強大國のブルジョアジーは世界の分配および搾取のため、諸民族の抑壓のために戦争を行ふ。労働官僚・労働貴族、並びに小ブルジョアの随伴者の小さな團には、ブルジョアジーの大利潤の斷片がこぼれ落ちてくることが可能である。排外社會主義と日和見主義との階級的基礎は同一のものであ

る。即ち労働階級の大衆に對する、小數の特權的労働者團と『自國』のブルジョアジーとの同盟、ブルジョアジーから搾取されてゐる階級に對する、ブルジョアジーの従僕とブルジョアジーとの同盟がそれである。

日和見主義と排外社會主義との政治的内容は同一である。即ち階級協働、プロレタリア××の拋棄、×××行動の拋棄、ブルジョアの合法主義に對する無分別なる尊重、プロレタリアートに對する不信とブルジョアジーに對する信頼とがそれである。排外社會主義は、イギリスの自由主義労働者政策、ミルラン主義並びにベルンスタイン主義の、直接の延長であり完成である。

労働者運動における二つの根本的傾向、即ち革命的社會主義と日和見主義的社會主義との闘争は、一八八九年から一九一四年までの全時代を充たしてゐる。戦争に對する關係といふ問題における二つの主要流派は現在もすべての國に存在してゐる。個人を問題とするブルジョアの、日和見主義的流儀を抛つて、流派を、しかも幾多の國々における流派を取り上げよう。ヨーロッパの十箇國、即ちドイツ、イギリス、ロシア、イタリア、オランダ、スウェーデン、ブルガリア、スペイン、ベルギー、フランスを考へて見よう。右のうち初めの八箇國においては日和見主義者と急進派と

の分布が、排外社會主義者とインタナショナル主義者との分布に合致してゐる。排外社會主義の基點は、ドイツでは『ゾチアルスチシエ・モナーツヘフテ』（『社會主義月報』）とレーギエン一味であり、イギリスではフェビアンと労働黨（獨立労働黨はつねに兩者と聯盟し、その日刊新聞を援助し、その辭の聯盟の中ではつねに排外社會主義者よりも力弱い、これに反してブリテン社會黨の中ではインタナショナル主義者は七分の三を占めてゐる）、ロシアではナーシヤ・サーリヤ（今はナーシエ・デ・エーロ）の一派と、組織委員會と、チヘイゼを領袖とする議員團、イタリアではピソラーチの指導の下における改良主義者オランダではトレルストラ黨、ブルガリアでは『廣心派』の黨、スペインではグロイリヒ一味である。これに對して右のすべての國において、それと對立的な急進派の陣營から、排外社會主義に對する多かれ少かれ徹底的な反對の聲が聞えてゐる。除外例はフランスとベルギーの二國のみであつて、この國にはインタナショナル主義は存在してゐるにはゐるが、まだその勢力は極めて力弱い。

排外社會主義は完成されたる日和見主義である。それはブルジョアジーおよび參謀本部と公然たる、往々習慣的な同盟を結ぶ程度にまで熟し切つてゐる。排外社會主義に大なる権力と、合法

的に印刷された言葉の獨占權と、大衆に對する欺瞞の獨占權とを與へてゐるものは、取りも直さずこの同盟なのである。今日なほ日和見主義をわが黨の内部における一現象と見做すのは笑ふべきである。パーゼル決議を、ダヴィッドリレーギエン、ハインドマン、ブレハノフ、ウニブと一緒に實行せんと欲するのは笑ふべきである。排外社會主義者との協同一致は、他國民を搾取する『自國』ブルジョアジーとの協同一致であり、國際的プロレタリアートを分裂させることである。しかしそれは日和見主義者との分裂が何處でも即刻に可能だといふ意味ではなく、この分裂は歴史的に成熟してをり、プロレタリアの×××闘争にとつて必然であり不可避的だといふこと、『平和的』資本主義から帝國主義的資本主義へ移つた歴史が、この分裂を準備してゐるといふことを意味するだけである。運命は欲する者を導き、欲せざる者を引きつづてゆく。

三

ブルジョアジーの賢明なる代表者はこのことを見事に理解してきた。その故に彼れ等は『祖國擁護者』即ち帝國主義的掠奪の擁護者を先頭とする現在の社會主義諸黨を、かくも賞讃してゐるの

である。その故に××は排外社會主義領袖に對して、或は政府の位地を與へ（イギリスやフランス）、或は合法的な、安泰な存在の獨占權を與へて（ドイツやロシア）ねぎらふのである。その故に社會民主黨が最も優勢であり、國民自由主義的な、反革命的な労働者黨への轉化が最も明白になつてゐるドイツでは、檢事が『少數派』と『多數派』との闘争を、『階級的憎惡の挑發』であると論ずる程度にまでなつてゐる！ その故に利口な日和見主義者は、一九一四年と一九一五年とにブルジョアジーに大なる貢獻をした舊來の諸黨の、舊來の『協同一致』を維持することに最も多く腐心してゐる。世界のすべての國におけるこの日和見主義者の見解を、ドイツ社會民主黨の一員が、感謝するに値ひする公然たる態度を以て一論說の中に言ひ現はしてゐる。この論說はモニートルといふ匿名を以て一九一五年四月に反動的評論雜誌『プロシヤ年報』に掲げられた。モニートルは社會民主黨がこの上になほ右傾することは、ブルジョアジーにとつて極めて危険であるといふ意見である。『社會主義的理想を有する労働者黨たるその（社會民主黨の）性質を、社會民主黨は保持しなければならぬ。けだしひとたびこの性質を抛棄した日には、さきに否認された綱領を、一層急進的な調子にして我が物にする新たな黨が生まれるに相違ないからである。』（プロシ

十年報、一九一五年、第四號、第五一頁。

モニターはまさに圖星をさした。イギリスの自由主義者とフランスの急進派とは、取りも直さずつねにそういふことをしたがつてきた。即ち大衆を惑はして、ロイド・ジョージ、ザンバー、ルノーデル、レーギエン、カウツキーの徒、即ち掠奪戦争中の「祖國擁護」を説教し得る人士に信頼を拂はせるようにするために、革命的に聞える空文句を弄することである。

だがモニターは日和見主義の一つの亞種を代表してゐるにすぎぬ。即ち公然たる、露骨な、プッキラ捧な日和見主義であつて、もう一つの亞種は、陰密な、上品な、『令名ある』ものである。(エンゲルスは嘗て曰く、『令名ある』日和見主義者は労働階級にとつて危険なものである……と。)こゝに一例をあげる。

カウツキーは『ノイエ・ツァイト』(一九一五年十一月二十六日)に次ぎの如く書いてゐる。『多數派に對する反對派は増大しつゝある。大衆は反對派である。』『戦後は(戦後だけか?——レーニン)階級對立は激成されて、急進主義が大衆の間に優勢を占めるだらう。』『戦後は(戦後だけか?——レーニン)急進分子が黨から脱退して、反議會的(?)、議會外の筈だ。』『大衆行動の一派へ注ぎ

込むのが目に見えてゐる。』『かくてわが黨は何等共通點を有せざる兩極に分れる。』『黨の統一を維持するためにカウツキーは多數派議員團に對して、少數派に二三の急進的議會演説を許してやるように説得せんと努めてゐる。言ひかへればカウツキーは二三の急進的議會演説を介して、XX大衆をして、永らく労働組合の指導權を掌握してきたところの、そして現在はブルジョアジーおよびXXとの直接の同盟の力をかりて黨の指導權を左右してゐるところの、XXと何等『共通點』を有せざる日和見主義者と融和させようと欲してゐる。その點においてモニターの『綱領』と何處に區別があるだらうか? マルクス主義を冒瀆する口あたりのよい空文句以外には少しも區別がない。

一九一五年三月八日の議員團の會議にはカウツキー派のウルムは、『弓を張り切る』ように議員團に『警告』して曰く、『労働大衆の間には多數派議員團に對する反對が増大してゐる。マルクス主義的(?)、多分誤植だらう、『モニター主義的』とすべき筈だ)中央派の立場を固執することが必要だ。』(『戦争に對する階級闘争。』『リープクネヒト事件』に對する資料。騰寫版、第六七頁。)かくて吾人は一九一五年三月には、すべてのカウツキー派(謂はゆる『中央派』)の名において、

大衆が革命的であるといふ事實がまだ認められてゐたのを見る!! そしてその八箇月半以後には、カウツキーはもう一度、戦はんと欲しつゝある此の大衆を、日和見主義的な反革命的な黨と『融和』させることを提議してゐる、しかも革命的に聞える二三の空文句の力をかりて!!

戦争は腐朽せるものを指摘し、因襲的なものを一掃する點で往々有益である。イギリスのフ・ピアンとドイツのカウツキー主義者とを比較して見よ。前者については本統の『マルクス主義者』フリードリヒ・エンゲルスが一八九三年一月十八日に次ぎの如く記してゐる、『……社會的革變の避くべからざることを見抜く充分な理解力を有しながら、粗野なプロレタリアートだけにこの偉業を委せ切ることができず、そのために先頭に立つ習慣を有する野心家の一團。××に對する恐怖が彼れ等の根本原則だ。』(ゾルゲとの書簡往來集、第三九〇頁。)

そして一八九三年十一月十一日には、『……粗野な無教育な大衆は自力では自己を解放することができないものであつて、見識ある辯護士や文士やセンチメンタルな婦人の慈悲を外にしては何物も實現し得るものでないことを、プロレタリアが悟るまでに聰明でありさへすれば、お慈悲を以てプロレタリアを高所から解放して仕はさうといふ、この高慢ちきなブルジョアども。』(前掲

書、第四〇一頁。)

理論上ではカウツキーは、パリサイ人が憐れむべき罪人に對するやうに、フ・ピアンを輕蔑の眼で眺めてゐる。といふのは、カウツキーは兎に角『マルクス主義』に忠誠を誓つてゐるから。しかし實際上では兩者の間にどんな區別があるだらうか? 兩者ともバーゼル宣言に署名しながら、ウ・ヘルム二世がベルギーの中立に對したと同じやうにこれを取扱つた。だがマルクスはその一生を通じて、労働者の×××炎を消さうとつとめた人間に對しては痛罵したのであつた。

カウツキーは×××マルクス主義者に反對して、『極端帝國主義』といふ新理論を提出した。彼れはこれを『國際的に結合せる金融資本による世界の共同搾取』が、『國民的金融資本相互間の闘争』を驅除することゝ解してゐる。(『ノイエ・ツァイト』一九一五年四月三十日。)然るに彼れはこれに附け加へて曰く、『資本主義のかゝる新たな段階が、果して實現され得るか否かは、これを決定するに充分な先要條件がまだ缺けてゐる』と。こゝにいふ『新たな段階』に對する憶測を根據として、この『段階』の發明者は——彼れ自身はこれを直接に『實現され得る』と説くことは敢へてしてゐないが——自分自身が昨日行つた革命的説明を否認し、すでに始つた危機の『段階』にあ

るところの現在において、戦争と階級対立の未曾有の激成の段階にあるところの現在において、プロレタリアートの×××任務と×××戦術とを否認してゐる！これは最も賤しむべきフェビアン主義ではないか？

ロシアのカウツキー主義者の指導者アクセルロッドは、『プロレタリア解放運動の国際化問題の重点』を、『日常的實踐の国際化』に認めてゐる——たとへば『労働者保護立法と保険立法とは、労働者の國際的行動および組織の目的と』ならねばならぬ。(アクセルロッド著『社會民主主義の危機』チーリヒ、一九一五年刊、第三九、第四〇頁。)レーギエン、ダヴィッド、ウエブ夫妻のみならず、ロイド・ジョージ、ノイマン、ブリアン、ミリュエフすらも、こゝにいふ『國際主義』には完全に左袒することは明白である。遠い遠い將來のことに對してはアクセルロッドは、一九一二年の場合におけるように革命的文句を案出する用意がある——曰く、將來のインタナショナルは「×××の口火を切ることを以て、(開戦の危機に迫つた場合に政府に) 對抗するだらう。」吾々は如何にまあ勇敢であるかを見てくれ！ ところが現在は大衆の間に始まりつゝある×××醜態を支持し促進することが必要かといふに、アクセルロッドは答へて言ふ、そゝいふ×××大衆行動の

戦術は、『たとへば専制主義に對する決戦の切迫を知らせた一九〇一年の大學生の示威運動以後のロシアにおける場合のように、吾々が直接に×××の前夜に當面してゐるとした場合には、或る是認を與へられよう。』しかし現在のところはそゝいふことは、『エトピア』、『バクーニン主義』等々であつて、コルプ、ダヴィッド、ジュデクム、レーギエンの意味するところと全然同感だといふのである。

善良なるアクセルロッドは只次ぎの一事を忘れてゐる。即ち一九〇一年には、最初の『決戦』が四年のうちに——記せよ、四年のうちに——始まつて『未決定』のまゝ終らうとは、何人も知らなかつたし、また知ることを得なかつたのである。それにも拘らず當時は吾々×××マルクス主義者のみが正しかつた。即ち吾々は直接即刻に動亂を叫んだクリチーフスキーやマルチノフを嘲笑した。吾々は労働者に向つて、日和見主義者をいたるところに追拂つて、全力をあげて示威運動その他すべての×××大衆行動を維持し、激成し、擴大するようにすゝめたゞけである。ヨローパの現状はこれと全く類似してゐる。いま『直接即刻に』動亂を喚び起すのは馬鹿げたことである。しかしながら苟くも社會民主主義者と名乗りながら、労働者に向つて、日和見主義者と絶

ヴィッド、ブレハノフ、アクセルロッド、カウツキー等の主張する如く——『狂氣の沙汰』、『夢想』、『冒險』、『バクーニ主義』であるとすれば、『國民間の内部的闘争』を誘致することは決してできまい。況んや、沸騰點まで高まつた闘争をや。世界中の何處においても無政府主義的文句が、國民内に内部的闘争を誘致したことは嘗てない。然るに事實は、一九一五年には取りも直さず戦争はよつて招致された危機を土臺にして、大衆の間に×××酸酵が生じてゐること、ロシアに同盟罷業と政治的示威運動とが、イタリアとイギリスとに同盟罷業が、ドイツに飢餓示威運動と政治的示威運動とが増大しつゝあることを教へてゐる。これは×××大衆闘争の開始でなくて何だらうか？

×××、×××、×××、×××、×××の創立——これを 『自由』な

國々においてすらも民衆に眞理を語ることを得ない——これがこの戦争中における社會民主主義の實際的綱領の全體である。×××××、×××××、如何に日和見主義乃至は平和主義の理論で以て飾り立てられようとも、すべて虚言か空文句かである。*

*一九一五年三月のベルン國際婦人會議において、わが黨中央委員會の婦人代表者は×××××を創立する

ことの無條件的必要に指摘したが、否決されることとなつた。イギリスの婦人代表者は、イギリスの『自由』を讚美してこの提議を嘲笑した。然るにその數ヶ月後には『レーバー・リーダー』の如きイギリスの諸新聞が痛めつけられ、次いで警察の家宅搜索、パンフレット類の沒收、逮捕、平和を——平和だけを——説いてゐるイギリスの同志婦人に對する峻嚴なる判決に關する報道が來てゐる！

こういふ『ロシア的戰術』(ダヴィッドの表現)はヨーロッパには適しないと云ふ人があるなら、單に事實を指摘することを以てこれに答へよう。ベルリンでは十一月三十日に、ベルリンの同志婦人の代議員が黨幹部會議に出席して次ぎの如く説いた、『×××の印刷物やビラの弘布や、×××集會の開催は、社會主義者鎮壓法時代に比して大なる組織機構を擁してゐる今日の方が容易である。』『手段と方法とが缺けてゐるのでなく、明らかに意志が缺けてゐるのだ。』(『ベルナー・ターグワハト』一九一五年第二七一號。)

この怪しからん同志婦人はロシアの『宗徒』どもに迷はされたのだらうか？ これらの同志婦人は眞の大衆を代表してゐるだらうか、それともレーギエンやカウツキーを代表してゐるだらうか？——レーギエン、彼れは一九一五年一月二十七日に報告演説の中で、×××組織創立は『無政

府主義的』觀念だと怒鳴つた。カウツキー、彼れはベルリンにおける一萬人の示威運動が行はれた四日以前の十一月二十六日に、街頭示威運動を『冒険』だと貶するまでに反革命的になつた!!

空文句は澤山だ、カウツキー流の冒瀆された『マルクス主義』はもう澤山だ! 第二インタナシヨナルが始つて以來二十五年後の今日、そしてバーゼル宣言の運命を目撃した今日、労働者はもはや空文句には何等信用を拂はないだらう。日和見主義は爛熟した、そして排外社會主義としてハッキリとブルジョアジーの陣營に移つて行つた。日和見主義は精神上にも政治上にも社會民主主義と絶縁してしまつた。組織上にも絶縁するであらう。労働者はすでに『XXX』の印刷物と『XXX』の集會を、言ひかへれば大衆のXXXの支持のためのXXXを要求してゐる。此くの如き『XXXXXXXXXX』のみが社會民主主義的仕事なのであつて、空文句を弄することがそんなのではない。そしてこの仕事は、困難や一時的な敗北や誤謬や錯誤や中絶が如何に大きなものであらうとも、やがては人類を勝利的XXXXXXXXXXに導くであらう。

スミス労働者に對する告別の手紙

一九一七年四月。(レーニンおよびトロツキー論文集『戦争と革命』)
チエーリヒ、一九一八年刊より。

同志諸君、スミス労働者諸君！

『中央委員会』（これと同一の名稱を帯びて組織委員会によつて糾合されてゐる第二の黨派とは別物である）に糾合されてゐる吾々ロシア社會民主労働者黨員は、いまスミスを去つてロシアに赴き、わが故國において×××國際主義的仕事を繼續せんとするに當つて、茲に諸君に對して同志としての挨拶を贈り、亡命者に對する諸君の僚友的態度に對して親愛なる尊敬の念を表明するものである。

公然たる愛國社會主義並びに日和見主義者、即ちプロレタリアートの列伍を去つてブルジョアジエの陣營に移つて行つたスキスの『グリュートリアン派』並びに萬國の愛國社會主義者は、諸君に向つてスミス労働者運動における外國人の『有害な作用』と戦ふことを公然と勸告してをり、——またスミス社會主義黨の指導者の間に多數を占めてゐる陰密の愛國社會主義並びに日和見主義者も、同じくこの政策を隠蔽されたる形で實行してゐる時に當つて、吾々は茲に聲明しなければならぬ、吾々は國際的地盤の上に立つてゐるスキスの革命的社會主義労働者から熱烈な歓迎を

受けた、そして彼れ等との交通によつて多大の利益を得てきたと。

吾々は政治的活動においてはつねに慎重であつた。殊にスミス労働者運動の諸問題についてはそれに通曉するためには相當長い期間地方的團體の中で協働することを必要とするものであるだけに、特に慎重な態度を取つてきた。しかしながら吾々のうちスミス社會民主黨員だつた人々（十人—十五人を出ない）は、社會民主主義運動の一般的基礎的諸問題については、愛國社會主義に對してのみならず謂はゆる『中央派』に對する鬭争を決定的に行ふために、吾々の立場を、即ち『チンマーワルト左翼』の立場を主張することが義務であると考へた。この『中央派』に屬するものは、スミスではエル・グリム、エフ・シュナイダー、ジャック・シュミット等、ドイツではカウツキー、ハーゼ、『労働共同團』、フランスではロンゲ、プレスマン等、イギリスではスノーデン、ラムゼー・マクドナルド等、イタリアではツラチ、トレヴェスおよびその盟友、ロシアで上記の『組織委員会』の一派（パウル・アクセルロッド、マルトフ、チヘイゼ、スコベレフ等）がそれである。

スミスにおける滞在の最後の瞬間に當つて、吾々は友愛の念を以てわが戦友たるスミス革命的社會民主主義者を思ふ。彼れ等は労働階級の最も重要な生活問題の解明のために戦ひ、スミス社

會民主黨大會の延期に反對して一九一七年復活祭に開催する運動において戦ひ、一般投票制の基礎を式示して、印刷し(ドイツ語およびフランス語で)、弘布したのであつた。彼れ等こそはテスにおける黨の州大會に對する青年および『左翼』の附加提案の主張する意味において、戦争に對する吾人の態度といふ極めて重大な問題に解決を與へんとつとめ、また一九一七年三月にはフランス系スミスにおいて、明白に××プロレタリアートの任務を眼中において『わが平和提案』といふリーフレットを發行し弘布したのであつた。

吾々はスミスの社會民主黨のみならずヨーロッパのすべての社會民主黨の力を弱め戦闘力を失はしめたあらゆる欠陥に對して、革命的銳氣を以て戦ひつゝあるところの、『フライエ・ユーゲンド』(『自由青年』)を中心として集つてゐる勇敢な青年前衛隊を思ふ。

ロシア革命の最初の烽火が揚つて、おそらく速かにロシアに歸國し得る見込みがついたとき、イギリスおよびフランスの帝國主義政府は、帝國主義ゲチコフ・ミリューコフ政府に對する不倶載天の敵であり帝國主義戦争の繼續に對する不倶載天の敵であるロシアの國際主義者が、ロシアに向つてこれらの國を通過するの許さなだらうといふことを、吾々は即座に意識して、そう

いふ希望は微塵も抱かなかつた。

しかもなほ吾々は、戦闘がまだ完結せず形勢がまだどつちとも明らかにされてゐない時に當つては、一人と雖も戦士が必要であるが故にロシアに赴かねばならないのである。

スミスを出立する前になほ吾々は、短かい告別の手紙に盡され得る限りロシア革命の任務について説きたいと思ふ。特に吾々は今日に至るまでまだ戦争を免がれてゐるところの、そして比較的最も多くの自由を享受してゐるところのスミス労働者を介して、且つこの國の國語の多種多様なことを利用して、ドイツ、フランス、イタリアの労働者に對することができし、また對しなければならぬのを思ふとき、一層そうすべき義務があることを感ずる。

ゼネバで發行されてゐる吾々の新聞、即ちわが黨中央機關紙『ゾチアル・デモクラット』(一九一五年十月十三日)第四七號にかゝげた聲明を、吾々は依然として固守するものである。吾々はそこに次ぎの如く説いた。ロシアに革命が勝利を得て共和政府が主權を執つた場合、この政府が帝國主義戦争を繼續するとしたら、即ちイギリスおよびフランスの帝國主義ブルジョアジーと同盟して行ふ戦争、コンスタンチノーブル、アルメニア、ガリシア等の占領を目的とする戦争を繼續

するとしたら、吾々はどこまでもこの政府の徹底的反對者であり、こゝろいふ戦争の場合の『祖國擁護』と戦ふであらうと。今や略々こゝろいふ形勢が始まつてゐる。ニコラス二世の弟と王制の再建のために商議したロシアの新政府、王制主義者グチコフとルウツォフとが主役を演じてゐる新政府は、今や『ドイツ人はウイヘルムを倒すべきだ』といふ合言葉で以て労働者を欺かうとかゝつてゐる！ それなら何故にこれに附け加へて言はないのか、『イタリア人とイギリス人とはそのXXを、ロシア人は王制主義者ルウツォフおよびグチコフを倒すべきだ』と。こゝろいふ合言葉で以てまたツァーリズムがフランスおよびイギリスと締結したところの、そしてグチコフとミリュコフとケレンスキー政府がこれを確認したところの、帝國主義的協定を秘密にすることによつて、この新政府は帝國主義戦争を、プロレタリアの立場から正常な戦争として辯護しようとかゝつてゐる。しかも一般にまだ實現されてをらず、ルウツォフおよびグチコフによつて只の一度も約束されたこともない、その共和國を擁護するといふのだ！ 政府はこゝろいふ具合にして、ロシア、イギリス等の資本の掠奪的帝國主義的目的の擁護を陰蔽しようといふとつとめてゐる。

最近の電報の報ずるところによれば、公然たるロシア愛國社會主義者（ブレハノフ、ザスーリッ

チ、ポトレンツ式の）と、組織委員會とチヘイゼ、スコベレフ等の代議士とを中心に集つてゐる『中央黨』とが、『ドイツ人がウイヘルムを倒さない限りは、吾々の戦争は防衛戦だ』といふ合言葉の下に接近し始めた——この報導が眞であるならば、吾々は従來チヘイゼとスコベレフ黨の動搖的な日和見的な態度に對して戦つてきたが、今後吾々はこの一派に對する戦ひを二倍の精力を以て開始するだらう。

吾々の合言葉はこゝろである——ミリュコフとグチコフ政府を支持するな！ この政府を支持することはツァーリズムの再建に對する闘争のために必要だと主張する者があれば、嘘をついてゐるのだ。それと反對に、取りも直さずグチコフ政府そのものが、すでに王制再建のための協約を結んでゐる。XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX、グチコフ一味がロシアに再建するのを防止することができる。XXX國際主義の旗印を固守するロシアおよび、ヨーロッパのXXXプロレタリアート、人類を帝國主義世界戦争の恐怖から解放することができる。

吾々はロシア・プロレタリアートの國際主義的前衛隊が當面してゐる非常なる大困難に對して眼を塞ぐものではない。吾々が現在閱みしてゐるような時代には、どんなに激烈な、どんなに急

つである。現在即刻に社會主義はロシアでは勝利を得ることはできない。しかしながらその國の農民的性質は、封建的大土地所有の存在を目前にして——一九〇五年の經驗が示したように——ロシアにおけるブルジョア民主主義的××に對して、これを社會民主主義的××××の序曲たらしめ、それに對する手引きたらしむるところの非常なる衝動力を賦與することができる。

一九〇五年並びに一九一七年の經驗によつて確認された右の觀念のための闘争において、他のすべての黨派に對する徹底的闘争において吾々の黨は自己を教育した。そして今後も引續いて吾々はこの觀念のために戦ふだらう。

ロシアでは社會主義は直接即刻に勝利を得ることはできぬ。しかしながら農民大衆は封建的巨大地所有の××まで既に成熟せる、不可避的な農村變革を實行することができる。この合言葉は吾々がつねに提出してきたものである。そしてこの合言葉は今日ベテルスブルグにおいて、わが黨の中央委員會によつて並びにその機關紙『プラウダ』紙上において、改めて大衆の間に投げ込まれたのである。プロレタリアートはこの合言葉のために戦ふであらう——一方に農村貸銀プロレタリアと吾々に心を傾けてゐる貧農と、他方に一九〇七年乃至一九一四年のストリピン『農

村改革』によつて優勢になつた富農と、この兩者の間の社會的闘争の避くべからざることによつて何等間違つた幻想を抱くことなしに戦ふであらう。百四人の農民代議士がすべての土地の國有と民主的に選舉さるべき地方委員會による土地の管理とを要求せる×××農村綱領を、第一回國會（一九〇六年）にも第二回國會（一九〇七年）にも提出したことを忘れてはならぬ。

かゝる變革はそれ自體としては何等社會主義的なものではない。しかしそれは國際的労働者運動に力強い拍車を與へるに相違ない。それはロシアにおける社會主義プロレタリアートの地位を殊の外強め、農村プロレタリアートと貧農との上にすばらしい影響を與へるだらう。この變革は貧農を基礎とせる都市プロレタリアートに對して『労働者代議員評議會』(ソヴイェット)の如き×××組織を構成する可能性を與へ、彼れ等は舊來の國家の××機關たる××、××、××××この組織に代へ、帝國主義戦争の怖るべき結果の負擔の下に、生産および消費を統制するための一連の××××方策を實行し得るであらう。

ロシアのプロレタリアートは自分自身の力だけを以て、××××××××を勝利的に實行することはできぬ。しかしながら彼れ等はこの種の變革のための最良の條件をつくり出すところの、そし

て或る意味でこの變革を開始させるところの衝動力を、ロシア革命に對して賦與することができ
る。そして彼れ等の最も主要な且つ最も忠實な盟友、即ちヨーロッパおよびアメリカの社會主義
プロレタリアートが決戦を始める場合の條件を緩和することができる。

ドイツではシャイデマン、レーギエン、ダヴィッド一味、フランスではゲード、ザンパー、ルノー
デル一味、イギリスではフェビアンや労働黨員の如き、帝國主義ブルジョアジーの唾棄すべき從僕
どもが、ヨーロッパ社會主義において暫時の間勝利を得てゐるのを見て、信念薄き人々は悲觀主義
に身を委ねるかも知れぬ。しかしながら吾々はXの波浪が、國際的労働者運動の上に漂つてゐ
る此の汚らしい泡濘をスグに押し流してしまふことをつねに確信してゐる。

ドイツでは四十年間のヨーロッパの『停止状態』(一八七一一一九一四年)の間に、プロレタリア大
衆は不斷の且つ頑強なる組織的精力を以て人類と社會主義とに多大の貢献をしてきた。今やプロ
レタリア大衆の釜が煮え立つてゐる。ドイツ社會主義の未來を代表するものは、裏切り者のシャ
イデマン、レーギエン、ダヴィッドの一味でもなければ、『平和的』時期の途上で錆びついてしまつ
たところの、グラ／＼した無性格の代物、ハーゼやカウツキーの一味でもない。

ドイツ社會主義の未來は、カール・リープクネヒトを生み、『スバルタクス團』を形づくり、ブ
レーメルの『アルバイター・ポリチーク』(雜誌『労働者政治』)となつて現はれたところの流派のも
のである。

X X X、 X X X、 X X X、 X X X、 X X X、 X X X、 X X X、 X X X、 X X X、 X X X、 X X X、 X X X、
X X X X X X X X X X X X、 X X X X X X X、 X X X X
X X X X X X X X X X X X、 X、
X X X X X X X X X X X X

わが黨が一九一四年十一月に、X、X X X、X X X、X X X、X X X、X X X、X X X、X X X、X X X X X X
X X X X X

『といふ合言葉を提出したとき、この合言葉は愛國社會主義者の敵對的な
惡意ある嘲笑を蒙り、『中央派』社會民主主義者の不信的懷疑的な、無性格的兩股的な沈黙に出合
つた。ドイツの排外社會主義者にして帝國社會主義者たるダヴィッドは、吾々を目して『亂心した』
と評し、これに反してロシアの(そして英拂の)排外社會主義——言葉での社會主義、行爲での帝
國主義——の代表者たるブレハノフは、吾々の合言葉に對して『夢道化』(夢と道化の合の子)と

いふ名をつけた。そして中央派の代表者どもは沈黙を守つたか、乃至は『眞の空場所に引かれた直線』といふ皮肉を弄した。

一九一七年三月以後の今日においては、この合言葉が如何に正しいものだつたかを認めないものは盲より外にはない。、x。

始、ま、り、つ、い、あ、る、ヨ、ー、ロ、ッ、パ、の、プ、ロ、レ、タ、リ、ア、x、x、x、x、x、x!

* * *

出發の途につける同志、ロシア社会民主労働者黨員(中央委員會に糾合されたる)を代表して。この書簡は一九一七年四月八日の會議において可決されたものである。

エヌ・レーニン

社 會 主 義 と 戦 争

戦争に對するロシア社会民主労働者黨の態度

レ
ー
ニ
ン
ジ
ノ
ヴ
ィ
エ
フ

一九一五年八月。(レーニンおよびトロツキー論文集『戦争と革命』
チャーリヒ、一九一八年刊より。)

序

戦争はすでに一年つゞいてゐる。わが黨は戦争に對する態度を、すでに戦争の最初の數箇月中に中央委員會の宣言において表明した。この宣言は一九一四年九月に書かれて、ロシアにおける中央委員會委員並びにわが黨所屬團體の責任ある代表者に送附されてその同意を得たのち、一九一四年十一月一日、わが中央機關紙『ゾチアル・デモクラット』第三三號に掲げられたものである。次いで『ゾチアル・デモクラット』は一九一五年三月二十九日の第四〇號に、わがベルン會議の決議を發表した。この決議は吾々の原則と戦術とを一層明確に表明せるものである。

最近ロシアの民衆の間には×××氣分が公然と増大しつゝある。プロレタリアートの×××努力は、×××およびブルジョアジーの味方に附いた官認社會主義諸黨の多數派のために抑へつけられてゐるにも拘らず、同一の兆候をすべての國々に認めることができる。かゝる事情は、戦争に對する社會主義的戦術の總勘定を示せるパンフレットの發行を命令的に要求する。茲に吾々は前記の黨の公文書をそつくり印刷に附して(附録参照—譯者)、黨の文書や集會において述べられたプ

ルジョアの並びにプロレタリア的戦争戦術を主張せる最も重要な議論を検討することによつて、右の公文書を簡単に解説することにする。

一九一五年八月

ジノヴィエフ
レーニン

一 社會主義の原則と一九一四—一五年の戦争

社會主義と戦争

社會主義者は國民間の戦争をつねに野蠻的な獸的なものと判断してきた。しかし戦争に對する吾人の態度は、ブルジョア的平和の友(平和主義者)や無政府主義者の態度とは原則的に別なものである。吾々は戦争と一國內の階級闘争との因果的聯絡を理解してゐる點において、また×××の撤廢と××××の勝利なくしては戦争に終結を與へることが不可能であることを理解してゐる點において、ブルジョアの平和の友と異つてゐる。また吾々は×××即ち支配階級に對する被抑壓階級の×××の必要を理解し、その進歩的性質を評價してゐる點においても異つてゐる。たとへば奴隸主に對する奴隸の闘争、領主に對する農奴、資本家に對する資銀労働者の闘争の場合がそうである。更らに吾々はあらゆる戦争を、その特殊性において歴史的に(即ちマルクスの辯證唯物的方法の立場から)評價する必要を理解してゐる點において、ブルジョア的平和の友や無政府主義

者と異つてゐる。あらゆる戦争には殘虐や獸行や窮迫や苦惱が付きものであるに拘らず、しかも進歩的だつた戦争が、言ひかへれば、有害且つ反動的な制度（専制主義と農奴制度の如き、またはトルコやロシアの野蠻な壓制政治の如き）の撤廢に力を籍すことによつて人類の發達に資した戦争が歴史上に存在してゐた。それ故に今日の戦争の特殊性を歴史的に捉へることが必要である。

近世の歴史的戦争型式

フランス革命は人類の歴史に新しい時期を開いた。それ以來バリ・コンミュンまで（一七八九—一八七一年）は、封建的専制的並びに外國の拘束の撤廢を主要内容とせるブルジョアの進歩的な國民解放戦争が、特殊の戦争型式を成してゐた。それは進歩的戦争であつた、それがためすべての革命的民主主義者も、封建主義、専制主義、並びに國民的抑壓の最も危険なる掩護物を取り除いたり弱めたりすることに努めた側の味方（即ちブルジョアジーの味方）に、同感を以て附いたのである。フランスの革命戦争の中には、フランス人による外國の掠奪および占領といふ要素も含まれてはゐたが、しかし全ヨーロッパの封建主義および専制主義の基礎を震動させた此の戦争の原

則的歴史的意義が、そのために變つたわけではない。普佛戦争ではドイツはフランスから掠奪したが、しかし幾百萬のドイツ人を、二人の専制君主即ちロシアのツァールとナポレオン三世とによる封建的分散と抑壓とから脱却させたといふ、この戦争の根本的な歴史的性質がそのために變つたわけではない。

防衛戦争と攻撃戦争

一七八九—一八七一年の時期は深刻な痕跡と革命的記憶とを遺した。封建主義、専制主義、外國支配が倒壊されるまで、社會主義のためのプロレタリアの闘争は發展することを得なかつた。社會主義者がこの時期において防衛戦争を是認すべしと語つたのは、取りも直さず右の目標を眼中に置いてゐたからである。即ち中世の遺物に對する革命がそれであつた。社會主義者は『防衛戦争』を、つねにこの點から見ての『正當』な戦争（ウイヘルム・リープクネヒトはこの概念を直截に右の如く解説した）と解してきたのである。この意味においてのみ社會主義者は『祖國擁護』即ち『防衛戦争』を是認し、その進歩的な且つ正當な性質を認め、また認めてゐる。明日に

でもたとへばモロッコがフランスに對して、インドがイギリスに對して、ベルシヤと支那がロシアに對して戦争を始めるとしたら、その戦争は正當な防衛戦争なのである。何人が戦争を開始したかといふことには係はりない。そして何人を問はず社會主義者は、大抑壓者および搾取者に對する被抑壓的隸屬的國家の勝利に同感を有するに相違ない。

ところが百人の奴隸の所有者が『公正な分配』のため二百人の奴隸の所有者と鬭争を始めたと思像して見よう。この場合に祖國擁護または防衛戦争の概念を適用することは、明らかに歴史的には虚偽であり、實際的には奴隸所有者の利益のために國民を欺くことである。しかも帝國主義ブルジョアジーは、 \times に、國民的イデオロギーと $\times\times\times\times$ の概念とで以て、丁度そいふ具合に國民を欺くのである。

帝國主義世界戦争

今日の戦争が帝國主義戦争であることは、殆んど萬人の認めてゐるところである。それにも拘らず大多數の場合この概念が釐造されてゐるか、それとも一面だけに適用されてゐるか、乃至は、

それにも拘らずこの戦争はブルジョア的進歩的な、國民解放的性質を有し得るといふ風に偽造されてゐる。

帝國主義は資本主義發展の最高段階を現はすものである。資本主義は國民國家を形成せずしては封建主義に打ち勝つことができなかつた、しかもその舊來の國民國家が今や資本主義にとつては狭過ぎるようになった。資本主義は集積の途上において、全産業部門をカルテル化、シンデケイト化して、これを二三の十億萬長者の掌中に置くほどにまで發達した。殆んど地球の全體がこゝろいふ資本權勢家の間に分配されてゐる。或は植民地の形において、或は財政的搾取の幾千の絲で海外諸國を縛りつけることによつて、競争および自由貿易に、獨占、投資圏や原料源の占領等に對する努力が取つて代つた。資本主義は封建主義に對する鬭争の時代には諸國民の解放者だつたのが、帝國主義時代には諸國民の最大抑壓者となつた。以前には進歩的だつたのが、今は保守的である。資本主義が生産力を發達させた結果、人類は社會主義への推移か、それとも、植民地、獨占、特權、あらゆる國民的抑壓を以てする資本主義の人爲的維持のための、大強國の數年、否數十年間の戦争か、そのいづれかに當面してゐる。

奴隸制度維持のための大奴隸所有者間の戦争

帝國主義の意義を解明するために、茲に大強國（即ち大成功を以て掠奪せる強國の謂ひ）間の世界分割に關する一覽表を掲げよう。

大強國	植民地面積		本國面積		總計
	一八七六年	一九一四年	一九一四年	一九一四年	
イギリス	二二・五	二五・一	三三・五	三九・三	三三・八
ロシア	一七・〇	一五・九	一七・四	三三・二	二二・八
フランス	〇・九	六・〇	一〇・六	五五・五	一一・一
ドイツ			二・九	一二・三	三・四
日本			〇・三	一九・二	〇・七
合衆國			〇・三	九・七	九・七
六大強國	四〇・四	二七三・八	六五・〇	五二三・四	八一・五
			一六・五	四三七・二	九六〇・六

平方キロ人口數
 (單位百萬) (單位百萬) (單位百萬) (單位百萬) (單位百萬) (單位百萬)

小國(ベルギー、オランダ等)に屬する植民地	三半植民地國(トルコ、ヘルシヤ、支那)	以上總計	その他の諸國	世界
		九・九		
	九・九	四五・三		
	九・九	四五・三		
	一四・五	三六一・二		
	一〇五・九	二三六七・一		
	二八・〇	二八九・九		
	一三三・九	二六五七・〇		

これによつて、一七八九年から一八七一年までの時代には自由のための戦ひにおいて先頭に立つて進軍してゐた諸國民は、後になつては、成熟せる、否、爛熟せる資本主義の土臺に立つて、全世界のすべての民族の多數者に對する抑壓者と化したのを見る。一八七六年から一九一四年までのうちに、大強國は二千五百萬平方キロメートルを掠奪した、即ちヨーロッパの二倍の大きさの地域である。そして五億人以上(五億二千三百萬人)の植民地住民を抑壓してゐる。即ち大強國住民四人當り、植民地住民五人の割合である。植民地は周知の如く砲火と劍とを以て占領された。

植民地住民は牛馬の如く扱はれてゐる。彼れ等は千種萬様の方法で榨取されてゐる(資本輸出、租借によつて、商品販賣の場合の欺瞞によつて、支配的國民の下に隷従させること等によつて)。

フランスおよびイギリスのブルジョアジーはベルギーその他の國民の解放のために戦争を行つてゐると主張して國民を欺いてゐる。實際には集團的に掠奪せる植民地を保持するために戦争を行つてゐるのだ。ドイツの帝國主義者は、イギリスおよびフランスが植民地を彼れ等に『公平』に分けてやりさへすれば、即座にベルギーを抛棄するだらう。この戦争において植民地の運命がヨーロッパ大陸上で決められるといふ點が、現在の事情の特殊性である。ブルジョア的な『公平』や『國民的自由』や『國民の生存權』の見地からすれば、ドイツは植見地の所有が『少な過ぎる』のだからイギリスおよびフランスに對して權利があるわけである。ドイツの敵國はドイツよりも多數の國民を抑壓してゐるし、また同盟國の一たるオーストリアでは、被抑壓スラヴ人は『諸民族の監獄』たるツアール・ロシアにおけるよりも、ヨリ多く自由を享有してゐる。しかしドイツは諸國民解放のためでなく、抑壓のために戦つてゐるのだ。年若かの盜賊(ドイツ)を扶けて、年長の飽食せる盜賊を掠奪させることは社會主義者の任務ではない。××××××××××××××××××××××

×××。××××××××××××。×××××××。そしてこの目的のためには社會主義者は何よりも第一に眞理を語らねばならぬ。この戦争は三様の意味で、奴隸制度確保のための奴隸所有者の戦争であることを指摘しなければならぬ。第一に、植民地の『公平』なる分割とそのヨリ一層の『連帶的』搾取とによつて、奴隸制度を確保するための戦争である。第二に、大強國そのものゝ國內における諸民族の抑壓を強固にするための戦争である。けれどオーストリアおよびロシアは(ロシアの方がズツと高い程度に)こゝいふ抑壓を基礎として成立してゐるのであつて、この抑壓を戦争によつて強固にしようとしてゐる。第三に、賃銀労働の確保並びに擴張を目的とする戦争である。けれど戦争はプロレタリアートを分裂させ抑へ付け、一方資本家は富を増殖し、國民的迷信を鼓吹し、すべての國々、最も『自由』な國々においてすら反動派を支持してゐるからである。

ベルギーの例

三國協商(現在は四國聯合)の愛國社會主義者——ロシアではブレハノフとその従者——は、悦

んでこの例を引證する。この例は彼れ等を反駁するものであることに気がつかない。ドイツ帝國主義は厚顔無耻にベルギーの中立を破つた。これはあらゆる交戦國が、條約や取決めた義務が邪魔になつた時にはいつもしてきた事柄である。國際條約の嚴守に關心を有するすべての國家が、ベルギーの解放と損害賠償との要求を以てドイツに宣戦したと假定しよう。その場合は社會主義者の同情はそれらの國家の上に集まるだらう。ところが四國聯合はベルギーのために戦争を行つてゐるのではない。これは周知のことであつて、欺瞞的にのみ緘黙されてゐるにすぎぬ。イギリスはドイツの植民地とトルコとを掠奪したがつてゐるし、ロシアはガリシアとトルコを取りたがり、フランスは所有してゐる植民地を擁護し、エルザス・ロートリンゲンとライン左岸を占領したがつてゐるし、イタリアとは獲物（アルバニアと小アジア）の分配に關する協定が結ばれてゐるし、ブルガリアおよびルーマニアとは獲物の小取引が行はれてゐる。資本主義大強國の戦争たるこゝにいふ戦争においては、オーストリア、トルコ等の息の根を止めることに協力せずしては、ベルギーを助けることはできないのである。さういふことは「祖國擁護」と何の關係があるだらうか？こゝに帝國主義世界戦争の特殊性が存する。即ち他國民の抑壓を目的として行はれるところの、

反動的な、歴史的に餘命が盡きてゐる資本主義國家の戦争の特徴がそこにある。こゝにいふ戦争への参加を擁護する人間は、諸國民の帝國主義的抑壓のことを緘黙してゐる。××××のための闘争にすべての大強國の困境を利用せよと主張する人間は、社會主義支配下においてのみ實現され得る諸國民の本當の自由を擁護する者である。

ロシアは何のために戦つてゐるか？

近世資本主義的帝國主義はロシアにおいてはベルシヤ、滿州、蒙古の強奪のための努力となつて現はれた。しかし全體としてはロシアには封建的專制主義的帝國主義が優勢を占めてゐる。世界何處でも民族の抑壓がロシアほど大なるところはない——大ロシア人は人口の四割三分を占めてゐるにすぎぬ、即ち半数よりも少いのである。にも拘らず他民族は權利がなく、「外國出」として取扱はれてゐる。一億七千萬のロシア人口中一億人は權利がなく抑壓されてゐるのである。ツァーリズムはガリシアの占領とルテニア民族運動の徹底的抑壓のため、またアルメニアおよびコンスタンチノーブルの占領のために戦争を行つてゐる。ツァーリズムは國內に増大しつゝある

を擧げてゐる。言ひかへれば、**×××××**の實例を擧げて論じてゐる。バーゼル宣言は取りも直さず現在の戦争のために、自國**×××**に對する國際的範圍においての勞働階級の**×××**闘争の戦術、**×××××××××**の戦術を命令してゐる。バーゼル宣言はシュツットガルト決議の言葉を繰返へして曰く、社會主義者は戦争勃發の場合には、戦争によつて惹き起された經濟的および政治的危機を、資本主義社會の**×××××**のために利用する義務があると。即ち宣言は戦争が招致せる**×××××××××**のために利用すること、**×××××**のために鼓舞することを要求してゐるのである。

愛國社會主義の政策、即ちブルジョアの「解放者的」議論を以てする戦争の擁護、祖國擁護の承認、戦費の協賛、入閣等、そのすべてが社會主義に對する直接の裏切りであつて、この裏切りは以下に述べるように、ヨーロッパ社會主義諸黨における日和見主義と國民自由主義勞働者政策との勝利によつてのみ説明されるものである。

マルクス・エンゲルスに關する誤れる引證

ブレハノフを先頭とするロシアの愛國社會主義者は一八七一年におけるマルクスおよびエンゲルスの戦術を引證してゐる。ドイツの愛國社會主義者（レンシニ、ダヴィッド一味の如き）は、ロシアとフランスがドイツと開戦した場合は（ドイツ）社會民主主義者は祖國擁護の義務があると語つた一八九一年のエンゲルスの論説を引證してゐる。國際的愛國社會主義のすべての部分を調停して、その一々が至極尤もであることを證明しようとしてゐるカウツキー型の愛國社會主義者はマルクスおよびエンゲルスは戦争を呪詛したが、それにも拘らず一八五九—七一年の時代と一八七〇年とは、一旦戦争が勃發するや交戦國の一方の味方に附いたことを引證してゐる。

すべてこれらの引證はマルクスおよびエンゲルスの意見をブルジョアジーと日和見主義とに有利なように偽造せるものであつて、ギョーム一味の無政府主義者の文書が、無政府主義を洗淨する目的でマルクスおよびエンゲルスの意見を贋造してゐると同一である。一八七〇年の戦争はナポレオン三世の倒壊まではドイツから見て進歩的なものであつた。けだしナポレオン三世は多年の間ツァールと一諸にドイツを抑壓し、その封建的分散を支持してゐたからである。そこでドイツの戦争がフランス掠奪に化したときは（エルサス・ロートリンゲンの併合）、マルクスおよびエ

ンゲルスはこの戦争を假赦するところなく呪詛した。なほ戦争の發端に當つてもマルクスおよびエンゲルスはベルンおよびリプクネヒトの戦費協賛の拒絶に同意し、社会民主党員に對して、ブルジョアジーと提携することなくプロレタリアートの獨立的利益を擁護することを忠告した。ブルジョアの進歩的戦争に對する此くの如き評價を現在の帝國主義戦争の上に移すことは、眞理に暴壓を加へることを意味する。一八五四―五五年の戦争その他十九世紀のすべての國民戦争を例證する場合もこれと同様であつて、この時代は近代的帝國主義も存在してゐなければ、すべての交戦國に社会主義大衆黨も存在してゐなかつた時代であり、客觀的事情が社会主義のためにまだ成熟してゐなかつた時代であつた。即ちバーゼル宣言がそれを基礎として大強國の戦争の場合に對する×××プロレタリア的戦術を規定してゐるところの、すべての條件がその時代には缺けてゐたのであつた。今日ブルジョアの進歩的時代の戦争に對するマルクスの態度を引證して、『労働者は×××』といふマルクスの言葉を、即ち殊に餘命の盡きたブルジョアジーの反動的時期、×××の時代に當てはまる此の言葉を忘却する者は、マルクスを厚顔無耻に偽造して、社会主義的見解に代ふるにブルジョア的見解を以てするものである。

第二インタナショナルの崩壊

一九一二年バーゼルにおいて萬國の社会主義者は堂々と聲明して言つた、吾々は來るべきヨーロッパ戦争をすべての××の罪惡的、反動的仕事と見做すものであつて、この仕事は資本主義の崩壊と資本主義に對する××とを促進するに相違ないと。然るに戦争が勃發するや社会主義諸黨の多數派は、×××戦術の代りに反動的戦術を實行して、その國の××とブルジョアジーの味方に附いた。社会主義のこの裏切りは第二インタナショナル（一八八九―一九一四年）の崩壊を意味するものであつて、吾々は何がこの崩壊の原因となつたか、何が愛國社会主義を生み出したか、そして何が愛國社会主義に力を賦與したかを考慮しなければならぬ。

愛國社会主義は完成されたる日和見主義である

第二インタナショナルの全歴史を通じて、あらゆる國において、あらゆる社会主義黨において、革命派と日和見派との闘争が演ぜられてきた。幾多の國々に亘つて、この點に關して分裂が行は

れた（オランダ、イギリス、イタリア、ブルガリア）。日和見主義は労働者運動におけるブルジョア的政策を代表するものであること、また日和見主義は小ブルジョアの利益に合致し、小範圍の労働貴族と「自國」ブルジョアジーとの同盟、即ち被抑壓的労働階級の利益に反対する同盟に順當するものであることは、マルクス主義者は誰れ一人として疑はなかつた。

十九世紀末時代の客観的條件は、ブルジョアの合法主義の利用を、それに對する拜跪と化したことによつて、また小範圍の労働官僚および労働貴族が発生したことによつて、また社会民主党の列伍内に小ブルジョア隨伴者が入り込んだことによつて、特に日和見主義の勢を強めた。

戦争は更らにこの發達を促して、日和見主義を愛國社会主義と化し、日和見主義とブルジョアジーとの陰密の同盟を公然たる同盟と化した。はいたるところに をもたらして

××××××××、同時に労働階級の舊來の指導者は大多數ブルジョアジーの陣營に移つてしまつた。日和見主義と愛國社会主義の經濟的基礎は同一のものである。即ち小範圍の特權的労働者および小ブルジョアの利益がそれであつて、彼等は自己の特權を、即ち自國ブルジョアジーの食卓から殘物を貰ふ權利、帝國主義的掠奪の方法で作られたブルジョアジーの利潤の一部にありつ

く權利を擁護するものである。愛國社会主義と日和見主義の政治的内容は同一のものである。即ち階級闘争の代りに階級協働、××××××××の拋棄、「××××」の ××××のために利用せずして××××を支持すること。一般にすべてのヨーロッパ諸國を眼中において、どんなに有力ではあつても個人を度外視するなら、取りも直さず日和見主義派は愛國社会主義の擔當者であることが判明するだらう。革命派の陣營からは殆んどいたるところに愛國社会主義に對する、多かれ少かれ徹底的な反對の聲が聞えてゐる。たとへば一九〇七年のシュツトガルト國際社会主義者大會における勢力分布を思ひ出すなら、當時すでに國際マルクス主義が帝國主義に反對し、國際日和見主義がこれに賛成してゐたことが判明するだらう。

日和見主義との一致は自國ブルジョアジーとの であり、
××××××××××労働階級の分裂である

戦前の時期においては日和見主義は『脱線』だの『誇張』だのと考へられてはゐたが、それでも往々社会主義黨の合法的な構成要素と見做されてゐた。戦争はそういう見解は將來に對しては

不可能であることを示した。日和見主義は成熟した、これは労働者運動内におけるブルジョアジーの廻し者たる使命を徹底的に實行した。日和見主義と協同一致することは、今や完全な騙りであることは、ドイツ社會民主黨の實例の示す通りである。すべて重大な場合(八月四日の如き)には日和見主義者は投票しにやつてくる、そして色々込み入つた繋がりを利用してブルジョアジーや組合幹部の多數派等に投票する。日和見主義者との協同一致は今や實際上では労働階級を自國のブルジョアジーに隷屬させることを意味し、外國民族の壓迫を目的として、並びに大強國たる特權擁護の闘争のためにブルジョアジーと同盟することを意味する。そしてすべての國の×××プロレタリアートを分裂させることを意味する。

多くの團體の中にはびこつてゐる日和見主義との闘争は個々の場合に當つては如何に困難であらうとも、また日和見主義からの労働者黨の洗淨は個々の國において種々様々に行はれねばならぬものであらうとも——この過程は必然であり且つ多望である。改良社會主義は死滅する、擡頭しつゝある社會主義は——フランス社會主義者ポール・ゴレーの至當な言ひ現はしによれば——×××的、非妥協的、×××的なものとなるであらう。

カウツキー主義

第二インタナショナル最大の權威者カウツキーは、あらゆる國々に認め得る或る一つの現象、即ち言葉の上でのマルクス主義の承認は實際上ではスツルーフ主義またはブレンタノ主義への轉化を誘致してきたことを示すところの、典型的現象を代表するものである。この現象はブレハノフにも認めることができる。マルクス主義の×××的な激刺たる精神が公然たる詭辯で以て去勢され、×××闘争手段とその宣傳、並びにその精神においての大衆の教育だけを除いて、マルクス主義の中のものすべてのが承認されてゐる。カウツキーは愛國社會主義の基礎的思想やこの戦争における祖國擁護の承認を、マルクス主義に對する外交的外見的讓歩と原則的に捏ね合せてゐる。この讓歩とは投票を控えることであつて、言葉に出しては黨その他の日和見主義的性質を力説することであつた。一九〇九年には來るべき革命期と、戦争と革命との關聯とについて一冊の書物を公けにしたカウツキー、一九一二年には來るべき××××××利用せよといふパーゼル宣言に署名したカウツキーが、今はあらゆる手段を以て愛國社會主義を擁護し、これを裝飾し

ブレハノフと同じくブルジョアジーに加入して、××に關する思想、×××××闘争への直接の前進をすべて嘲笑してゐる。

労働階級はこういふ背教と、こういふ無性格と、日和見主義に對するこういふ幫間根性と、マルクス主義に對するこういふ未曾有の冒瀆とに對して假赦するところなき闘争を行はずしては、自己の史的使命を履行することはできぬ。カウツキー主義は決して偶然ではなく、第二インタナショナルの矛盾、即ち言葉の上でのマルクス主義の容認と行爲においての日和見主義への恭順の社會的産物である。

マルクス主義者の標語——革命的社會民主主義者の標語

戦争は疑ひもなく最も重大な危機を生み、民衆の苦しみを極度に深めた。この戦争の×××性質、掠奪の目的を『國民的』イデオロギーの外套で包んでゐるブルジョアジーの厚顔無耻な虚言、すべてこれらのものは客觀的××的形勢の土臺の上に、大衆の間の×××氣もちを不可避的に生み出すものである。吾々の義務はこの氣もちを意識させ、これを深め且つこれに形を與へること

である。この任務は『帝國主義戦争の×××××』といふ合言葉によつてのみ正當に表現され、戦争中における的確な階級闘争、眞面目に實行される『大衆行動』の戦術が、一つ毎に不可避的にこの轉化に導く。強大な××運動が大強國の第一回の戦争の結果として現はれるか、第二回の戦争の結果として現はれるか、戦争中に勃發するか戦争後に勃發するかは何人も知るところではないが、いづれにもせよ正さにこの方面に向つて、系統的に牢乎として働きかけることが吾々の無條件的義務である。

パーゼル宣言はパリ・コンミンの例を——即ち×××××××××轉化させることの例を力強く引證してゐる。半世紀以前はプロレタリアートは餘りに力弱く、社會主義の客觀的前提はまだ成熟してをらず、すべての交戰國の××運動の協働は思ひもよらず、また『國民的イデオロギー』（一七九二年の傳統）に對するパリ労働者の一部の狂信は、マルクスも指摘したように彼れ等の革命的弱點であり、コンミンの崩壊の原因の一つだつた。然るに半世紀後の今日では、當時の革命を弱めた諸條件は消え去つてゐる。そして今日社會主義者にしてパリ・コンミンの戰士の精神で働くことを抛棄せんと欲するものがあれば許すべからざることである。（次ぎの一節『壺澤内におけ

主義者の義務である。社会民主主義者はこれを基礎とするあらゆる運動、あらゆる示威運動に最も熱心に参加するだらう。しかしながら領土の併合並びに民族に対する暴壓と掠奪なしの平和がまた現在の および支配階級間の新たな戦争の萌芽なしの平和が、××××××なくして可能だといふ思想を認めることによつて民衆を欺くことはしないだらう。××××××××××は交戦政府の秘密外交と反革命的計画にとつて役立つのみである。永久的な民主主義的平和を欲する者は、××およびブルジョアジーに對する××に賛同しなければならぬ。

民族自決權

この戦争におけるブルジョアジーの最も弘布されてゐる欺瞞手段は、自己の掠奪目的を『國民解放』のイデオロギーで以て隠蔽することである。イギリス人は——ベルギーを、ドイツ人は——ポーランドを解放すると約束してゐる。實際上はこれは既に述べたように諸國民の多數者の抑壓者同志が、この抑壓を確保し擴張するために行つてゐる戦争である。

社会主義者は國民のあらゆる抑壓に對して戦はずしては、自己の偉大なる目的を達することは

できぬ。その故に社会主義者は抑壓してゐる國（殊に謂はゆる大強國）の社会民主黨が、抑壓されてゐる國民の自決權を——しかも政治的意味において、即ち政治的獨立に對する權利として——是認し擁護することを要望しなければならぬ。大國または植民地所有國の社会主義者にしてこの權利を擁護しない者は排外主義者である。

この權利の擁護は小國家の形成を奨励するものではなく、反對に、大衆にとつて一層有利であり經濟的發達に一層適應するところの最も大きな國家および國家聯合の、ヨリ自由な、ヨリ臆病でない、従つてヨリ擴張的な、ヨリ一般的な形成を誘導するものである。

抑壓されてゐる國民の社会主義者の方からいへば、抑壓する國民と抑壓されてゐる國民との労働者の、完全な（就中組織的な）協同一致を主張しなければならぬ。民族は相互に分離する權利があるといふ思想（謂はゆるオー・パウエルやレンナーの民族的文化自治）は反動的思想である。

帝國主義は一束の『大強國』による全世界の國民の増大的抑壓の時期であり、従つて國際的××××××のための闘争は民族自決權の承認なしには不可能である。『他國民族を抑壓してゐる國民は自由であり得ない』（マルクスおよびエンゲルス）、他國民に對する『自國民』のどんな小

な暴歴でも放置するプロレタリアートは社會主義的であり得ない。

二 ロシアにおける階級および黨と戦争との關係

ブルジョアジーと戦争

或る一點ではロシアの政府はヨーロッパの政府に退けを取らない。即ち後者と同じくロシアの政府は大規模な『自國民』の愚弄を實行することを心得てゐた。大衆に排外主義を感染させ、ツァール政府は『公正な』戦争を行つてゐて『スラヴ同胞』を誠心誠意擁護してゐるといふ觀念を吹き込むために、ロシアにおいても虚言および虚構専門の巨大な機關が運轉された。

地主貴族と商工ブルジョアの上層とはツァール政府の戦争政策を熱心に支持した。そして彼れ等としては至極尤もな感情を以て、トルコおよびオーストリアの遺産分配から、すばらしい物質的利益と特權とを得ることを期待した。彼れ等の幾多の大會はツァール軍隊が勝利を得た時に自己等の懐に注ぎ込む利潤を思つて、今からもう涎を流してゐる。その上に反動派は、何等かの事情でロマノフ王制の倒壊が延期され、ロシアにおける新たな革命を停止させ得れば、それだけでも

ラッパールにとつての勝利的な對外戦争が可能になることをよく心得てゐる。

都市中ブルジョア、ブルジョア知識分子、自由職業者等の廣汎なる諸層は、少くとも戦争の當初は矢張り排外主義に感染してゐた。ロシアの自由主義ブルジョアジエの黨たるカデット（立憲民主黨）は、何を犠牲にしてもラッパール政府と歩調を合せた。對外政策の領域ではカデットは政府黨である。大規模な政治的瞞着の手段として既に何遍となくラッパール外交の御用に立つてきた汎スラヴ主義が、カデットの公式のイデオロギーとなつた。ロシアの自由主義は、國民的自由主義に退却してゐる。そして黒色百人組と愛國主義を競ひ、つねに大悦びで軍國主義、海軍擴張等に賛成してゐる。今やロシアの自由主義の陣營の中には、七〇年代にドイツで自由思想的自由主義が瓦解してそこから國民自由黨を結晶させた時と、略々同一の現象が認められる。ロシアの自由主義ブルジョアジエは究極において反革命の道に踏み込んだ。この問題に對するロシア社會民主黨の見地は完全に確證された。ロシアの自由主義はロシアにおける革命の推進力だといふわが日和見主義者の見解は破綻した。

支配的徒黨はブルジョア新聞や僧侶等の力をかりて農民の間にも排外的氣もちを喚び起すに成

功した。しかしながら××××××××××するにつれて、それと同じ割合に、農村における氣もちも××××××××××に不利なものに變ずるだらう。農民と接觸してゐるブルジョア民主主義諸黨は、排外主義の氾濫に反抗しないことを心得てゐた、なるほど國會におけるトルドウィキ黨（農民民主黨）は戦費を否決するにはした。しかしながらこの黨の指導者ケレンスキーは、黨を代表して只々反動派にだけ氣に入る『愛國的』聲明を發したのである。ナロードニキの合法新聞は大體に於いて自由主義に調子を合はせた。それのみかブルジョア民主主義の左翼——國際社會主義事務局に代表者を送つてゐる謂はゆる社會革命黨——も、これと同じ航路に舵を向けた。國際社會主義事務局におけるこの黨の代表者ルバノウィチは、公然たる愛國社會主義の名乗りをあげてゐる。この黨の代議員の半數は協商國社會主義者のロンドン會議で排外主義的決議に投票した（その際残りの半數は投票を保留した）。社會革命黨の違法新聞『ナウァーヌチ』（その他）には排外主義者が優勢を占めてゐる。『ブルジョアの環境』の革命家、即ち勞働階級と結合してゐないブルジョアの革命家は、この戦争で剃滅的に難破した。クラボトキン、ブルツェフ、ルバノウィチの悲惨な運命は異常に著しいものである。

労働階級と戦争

ロシアにおいて排外主義的欺瞞に害はれ得なかつた唯一の階級はプロレタリアートである。開戦當時所々に起きた興奮は労働者中の最も無知な諸層を捉へただけであつた。労働者がモスコイの排獨的一揆に参加したといふのは、非常に誇張されてゐる。大體においてロシアの労働階級は、排外主義に完全に犯され得ないものであることが立證された。

このことはロシアの一般的な革命的状態からと、この國の全般的な生活条件とから説明される。一九二一—二四年はロシアにおける新たな、すばらしい革命的飛躍の發端を劃した時代である。吾々は再び世界未曾有の大罷業運動の目撃者となつた。一九一三年には最も内輪な見積りによるも、衆罷業の参加者は百五十萬人を算へ、一九一四年には早くも二百萬人を出で、罷業は一九〇五年の時の水準に近づいた。開戦間際にはベテルスブルグに早くも最初のバリケード戦闘が演ぜられるに至つた。

違法的ロシア社會民主労働者黨はインタナショナルに對する義務を履行した。インタナショナル

主義の旗幟は黨の掌中に微動だにもしなかつた。黨は日和見主義的集團および分子と夙に組織上に絶縁してゐた。日和見主義と『合法主義一天張り』は吾々の足もとにも寄りつかなかつた。そしてこゝいふ事情が吾々を扶けて×××義務を履行させたのである——丁度日和見主義的ビツライチ派との分裂がイタリアの同志を扶けたように。

わが國における一般状態は労働大衆内における社會主義的日和見主義の勃興には決して有利ではない。ロシアでは知識分子や小ブルジョア等の間に日和見主義と改良主義の幾多の分派を認められるが、政治的に活動してゐる労働者諸層の間には、あるかないか程の少数である。特權的な労働者および使用人の層はわが國では極めて微弱である。合法萬能の拜物教は吾々の間には發生することを得なかつた。解黨派リキエトリ(アクセルロッド、ポトレソフ、チュレワニン、マスロフ等の指導する日和見主義者黨)は、戦前には労働大衆の間に大した追隨者を有してゐなかつた。第四回國會の選挙には、労働者選挙會議を有する六都市の全部において解黨派の反對者が勝利を得た。ペトログラードおよびモスコイにおける合法的労働者新聞の發行部數と集金とは、階級意識ある労働者の五分の四が日和見主義と解黨主義とに反對であることを明白に示した。

開戦後ツァール政府は幾千となき指導的労働者やわが違法的ロシア社会民主労働者黨員を逮捕し、追放した。この事情は戒嚴令の發布や吾々の新聞雑誌の禁壓その他と共に運動を阻止した。それにも拘らずわが黨の×××活動は繼續してゐる、ペトログラード委員會は××新聞『プロレタルスキー・ゴロス』、『プロレタリアの聲』を發行してゐる。國外で發行されてゐる中央機關紙『ゾチアル・デモクラット』所載の論説は、ペトログラードで印刷されて地方に送られてゐる。幾多の違法的宣言書が發行されてゐて監獄の中にも弘布されてゐる。村落では方々の隔立つた片隅で違法的労働的集會が催されてゐる。

國會におけるロシア社会民主労働者議員團と戦争

一九一三年には國會における社会民主黨議員の間に分裂が生じた。一方には議員チヘイゼの指導の下に七名の日和見主義信奉者がある。彼れ等は總計二一四、〇〇〇人の労働者を數ふる非プロレタリア的な七縣を代表してゐる。他方には六名の議員、その全部が労働者選舉會議から選出されたるものであつて、總計一、〇〇八、〇〇〇人の労働者を算するロシアの工業中心地から選出

されたものである。

意見の相違の主眼點は、×××マルクス主義の戦術か、日和見主義的改良主義の戦術か、と云ふ點であつた。實際上の相違は議會外の大衆活動の領域に一番多く現はれた。この活動は、活動者が×××土臺の上にとゞまりたいと思ふなら、ロシアでは×××に行はねばならなかつた。チヘイゼ議員團は×××仕事を拒否する解黨派リゾルーションの最も忠實な盟友であつて、労働者とのすべての討議、すべての集會において自分等の戦術を擁護した。そこで分裂が起きたのである。六名の議員はロシア社会民主労働者議員團を構成した。一年間の仕事は取りも直さず彼れらの側に、ロシア労働者のすばらしい多數が附いてゐることを明白に示した。

開戦後にはこの意見の相違は極めて明瞭に現はれた。チヘイゼ議員團は議會主義の土臺にだけ身を局限した。彼れ等は戦費を協賛しなかつた。そうしなければ労働者側からの憤怒の嵐を引き起すからである。(ロシアでは、それどころか小ブルジョアのトルードウィキ黨すらも戦費を協賛しなかつたのを吾々は見た。)しかしチヘイゼ議員團は愛國社会主義に對する何等の抗議をも大衆の間に持ち込まなかつた。

吾々の黨の政治的方向を表現したロシア社會民主労働者議員團の態度は全くこれとは別であつた。彼れ等は戦争に對する抗議を以て深く労働大衆の中に入り込み、反帝國主義宣傳をロシア・プロレタリアの廣汎なる諸層の中に持ち込んだ。

そして彼れ等は労働大衆の間に熱心な共鳴を見出した。このことは政府を震駭させ、そのために政府は政府自身の法律を公然と破つて吾々の議員を逮捕し、シベリアへの終身追放を宣言した。わが黨員の逮捕に關する最初の公式告示書の中に、ツァール政府は次ぎの如く記した。

『社會民主主義團體の若干の所屬員は、この點に關し極めて奇怪な態度を取り、戦争反對の煽動、秘密ピラ、並びに口頭の宣傳を以てロシアの戦争權力を顛覆することを目的とした。』

ツァーリズムに對する闘争を一時中止せよといふ、ヴァンデルヴェルドの有名な要求は——ベルギーにおけるツァールの使節、クダシエフ侯の報告によつて、ヴァンデルヴェルドがこの要求を自分から拵へたのでなく、右のツァール使節と協力して拵へたものだといふことが分つたが——この要求に對して拒絶の回答を與へたものは、ただ吾々の黨、しかもその中央委員會側からだけであつた。解黨派の事實上の指導的中心はヴァンデルヴェルドに同意して、機關紙上で「戦争に對抗するよう

な活動はしない」と聲明した。

ツァール政府はヴァンデルヴェルドに對するこういう拒絶の回答を労働者の間に宣傳したといふ答で、吾々の議員を起訴したのである。

ツァールの検事ネナロコモフ氏は法廷に立つたわが同志に對して、ドイツおよびフランスの社會主義者を手本として獎めて、こう言つた。『ドイツ社會民主黨員は戦費を協賛して政府の友たることを示した。ドイツ社會民主黨員はそういう風風に振舞つたのに引きかへ、ロシア社會民主黨員の向見ず連中の態度は全然別であつた。……ベルギーおよびフランスの社會主義者は一致して他の階級に對する從來の要求を忘れてしまひ、黨派的争訟を抛棄し、逡巡するところなく國旗の下に集つた。然るに社會民主労働者議員團の所屬員は中央委員會の指令を履行して、これと別な態度に出た。』

裁判はプロレタリア大衆の間にわが黨が行つた戦争反對の廣汎なる××××の目ざましい圖景を示した。ツァール政府はこの點に關するわが同志の全活動の「真相を暴露する」ことに決して成功しなかつたのは自明のことである。しかしながら暴露された事柄は、一二月の短日月のうち

如何に多くのことが行はれたかを示した。

戦争に反対し國際主義ロシアを主張せる吾々の諸團體および委員會の秘密ピラが、法廷で讀みあげられた。全力を擧げて労働者に對して、戦争をマルクス主義的立場から判斷するように力を藉したロシア社會民主労働者議員團の所屬員に向つて、全ロシアの階級意識ある労働者から無数の絲が引かれた。

ハルコフ縣選出の労働者議員、同志ムラノフは法廷の前で次ぎの如く語つた。

『予は議會の肘掛椅子を暖めるために民衆から送られたのではないと心得てゐたから、労働大衆の氣もちに通曉するために地方を旅行して廻つた。』彼れはまたわが黨の××煽動者の職分を受持つてゐたこと、またウラルにおいてオーベリゼツヘル工場その他に労働者委員會を組織したことを、法廷において自白した。ロシア社會民主労働者の所屬員は開戦後は宣傳の目的のために殆んど全ロシアを廻つたこと、またムラノフ、ペトロフスキー、バタイエフその他の人々は無数の労働者集會を催して戦争反対の決議文を作らせたり何かしたことが、審問の結果明らかにされた。

ツァール政府は被告を死刑で嚇かした。その結果すべての人々が同志ムラノフのように勇敢には

法廷に臨まなかつた。彼れ等はツァール檢事の求刑を重くすることにとめた。この事情を現在ロシア排外主義者は、問題の本質——如何なる議會主義が労働階級に必要なかといふ——を胡魔化するために不手際に利用してゐる。

議會主義をジューデクムやハイネも、ザンバーやヴァイヤンも、ピソラーチやムソリーニも、チヘイゼやブレハノフも認めてゐる。議會主義をわが社會民主労働者議員團の六名の同志も認めてゐるし、愛國社會主義者と絶縁したブルガリア、イタリアの同志も認めてゐる。議會主義は二通りある。一方は議會主義を、政府に秋波をつかふために、またはチヘイゼ議員團がやつてゐるように高々政府の手を洗ひ淨めるために利用してゐる。他方は議會主義を、×××陣地をどこまでも固執するため、社會主義者および國際主義者としての義務をどんなに悪い條件の下においても果すために利用してゐる。一は議會活動を大臣の椅子に運び、他は牢獄、追放、懲役の中に持ち込む。一はブルジョアジーに、他はプロンタリアートに仕へてゐる。一は愛國社會主義者、他は×××マルクス主義者である。

三 インタナショナルの再建

如何にしてインタナショナルは再建されるべきか？ まづ最初にインタナショナルは如何に再建されるべきでないかといふ點を二三論じよう。

愛國社會主義者および『中央派』の方法

萬國の愛國社會主義者はインタナショナルの熱情的信奉者だ！開戦以來彼れ等はインタナショナルに對する心配のために殆んど打ちのめされてゐる。一方では彼れ等はインタナショナルの崩壊に關するすべての噂は單なる『誇張』であつて——實際上にはそんなことは少しも起きてゐないことを、吾々に保證してくれる。試みにカウツキの言を聽け。インタナショナルは單なる平和機關である——そつといふ性質のものが戦時には役に立たないからと言つて、何の不思議があらうか？他方では萬國の愛國社會主義者はこの難點を切り抜けるために、極く簡単な、そして同時に——これはこの場合最も重要な點のだが——國際的な小手段を案出した。この簡単な小手段といふ

のは次ぎの事柄である。曰く、人々は戦争の終るのを拱手して待たなければならぬ——それまでは各國の社會主義者は、自國の尊敬すべき『祖國擁護者』を抛護し、『自分等の』政府を支持すべきである。そして××××××××人々は互ひに『大赦』し合ふだらう、そしてすべてがそれぞれ當を得てゐたことを認めるだらう。即ち吾々は平和時代に
して生活し、戦時にはあれやこれやの決議に基いて、ドイツの労働者に對してはフランス
××するようには、フランスの労働者に對してはドイツの労働者に對してはフランス
ドイツの労働者に對してはドイツの労働者に對してはフランス
ドイツの労働者に對してはドイツの労働者に對してはフランス

××するようには、フランスの労働者に對してはドイツの労働者に對してはフランス
ドイツの労働者に對してはドイツの労働者に對してはフランス
ドイツの労働者に對してはドイツの労働者に對してはフランス
ドイツの労働者に對してはドイツの労働者に對してはフランス

は悔悟の遅かりしを認めねばならぬだらう。『ハインネは『ゾチアリスチシエ・モナーツヘフテ』においてエミール・ヴァンデルヴェルドの『毅然たる男らしい』態度を認めて、彼れをドイツの左翼の同志が倣ふべき實例として擧げてゐる。

一言でいへば、戦争が終つたら、カウツキー、ブレハノフ、ヴァンデルヴェルドおよびアドラーより成る一委員會を任命すればそれでよいのだ。そうすればこの委員會は立ちどころに、大赦の精神に充ち満ちた『満場一致』の決議文を提出するだらう、そして——今までの全闘争がこれによつて首尾よく瞞着されるだらう！……労働者に出来事の真相を掴ませようとはしないで——紙の上の『協同一致』で以て労働者を再び欺かうとつとめるだらう。そしてこういう愛國社會主義者とベテン師との集まりが、『インタナショナルの再建』と呼ばれるだらう！……

かゝる『再建』の危険は極めて大であることを秘密にして置くべきではない。萬國の愛國社會主義者はそれに共通の利益を有してゐる。彼れ等はすべて労働大衆が、社會主義か國民主義かといふ問題を解決することを望んでゐないのだ。彼れ等はすべて相互の罪を隠蔽することに利益を感じてゐる——そして國際的欺騙の玄人たるカウツキーが提案する以外のものを、吾々に提供す

ることはできないのである。それにも拘らず人々はこの危険にあまり考慮を拂つてゐない。吾々は戦争中の過去一年の間に、國際的聯結を再建せんとする幾多の企圖に遭遇してきた。正札つき
の愛國主義者が各自の『祖國』の參謀本部とブルジョアジーとを幫助するために集つてきたロンドン會議やウィン會議のことは言ひたくない。ルガノおよびコペンハーゲンの會合や、國際婦人會議や、國際青年會議を指して言ふのである。これらの會議はすべて最善の希望に鼓舞されたものであつたが、こゝに指摘した危険を認めなかつた。それらの會議はインタナショナル主義者の闘争方針を確立することを避け、労働者に對して愛國社會主義者のインタナショナルの再建計劃を警戒することをしなかつた。それらの會議は、社會主義の任務は愛國社會主義者との闘争を缺いては失敗であることを、プロレタリアに注意させることはせずに、高々從來の決議を新たに確認するだけのことに限つた。

反對派側の事情

最大の關心を以てインタナショナル主義者はドイツ社會民主黨反對派の發展を注視する。第二イ

見上のマルクス主義の假面の下に説教する者は、労働者を痲痺させるものであつて、何事も隠し立てをせず公然と問題を提出することによつて、労働者に對して針路を定めることを強要するところの、ジューデクムやハイネよりも危険な人間である。

カウツキーとハイゼとは目下黨の法廷に對して抗議を行つてゐるが、何人をも迷はすことを得ない。彼れ等とシャイデマン一派との間の意見の相違は何等原則的なものではない。一方は、ヒンデンプルグとマッケンゼンとは既に勝利を得た、従つて併合反對といふ贅澤な眞似を許して差支へないと信じてゐるし、他方はこれに反して、この兩元帥はまだ勝利を得てゐない、従つて『最後まで持ち耐へよ』といふ福音を労働者にまだ説教しなければならぬといふ意見である。カウツキーとその追隨者とは『法廷』に對して擬戦を行つてゐるだけであつて、そうした上で今度は労働者に對して原則上の對抗を隠蔽して、美しく化粧したところの、『左翼』を装つた大變な決議文で以て問題を胡魔化そうとするのだ。

ドイツの反對派は黨の法廷との闘争においてはカウツキー派の稀薄な反對をも利用して差支へないことは、これを認めなければならぬが、それにも拘らず眞のインタナショナル主義者にとつて

は、新カウツキー主義に對して否定的態度を取ることが依然として義務である。この傾向との闘争を行ふ意志のある人、そしてカウツキーの『中央派』はその指導者の外見的な改宗後と雖も、依然として原則の問題においては排外主義者および日和見主義者の同盟者であることを會得する人のみが、眞のインタナショナル主義者である。

インタナショナル中の動搖的分子に對する吾々の態度は重要な意義を有するものである。かゝる分子——主として社會主義者——平和主義者は、中立國にも交戦國にも存在してゐる（たとへばイギリスでは獨立労働黨）。かういふ分子は吾々の共同闘士となり得るものであつて、彼れ等と共同して平和社會主義者に當ることは必要である。しかしながら忘れてはならぬ、彼れ等の多くは單なる隨伴者にすぎないものであつて、インタナショナル再建に關するすべての原則的問題においては、吾々と立場を共にせずして、カウツキー、ザンバー、ヴァンデルヴェルドおよびその他のシャイデマン一味と懇ろに協同して吾々に反對の立場を取るだらう。國際會議においては、綱領を、かういふ動搖的分子に受け容れられるようなものばかりに限つてはならぬ。そうしなかつたならベルンの國際婦人會議の場合のように、吾々自身がこれらの平和主義者の虜となるだらう。クララ。

ツェトキンの立場を取つたドイツ代議員はこの會議で『中央派』の役割を演じた。婦人會議はオランダの日和見主義的トレルストラ黨の代議員や獨立労働黨の代議員——因みにこの黨は協商國側のロンドン排外主義者會議でヴァンデルヴェルドの決議文に賛成した———そういふ代議員に受け容れられ得るようなことばかりを言つた。吾人は獨立労働黨が開戦以來イギリス政府に對して男らしい闘争を行つてゐるのに對して、最大の敬意を表する。しかしながら吾人は、この黨はこれまで決してマルクス主義の土臺の上に立つて來なかつたし、また現在も立つてゐないことを知つてゐる。そして吾々は現在の時機における社會民主主義的反対派の主要任務は、××的マルクス主義の旗幟をかゝけて、この帝國主義戦争に對する吾々の態度を、労働者に明確に語ることであると考へる。現在における吾々の任務は×××大衆行動に合言葉を與へること、即ち帝國主義を×××××することにとめることである。

舉國一致といふ狂亂状態にも拘らず大多數の國々にはなほ×××社會民主主義分子が存在してゐる。ドイツにも存在してゐれば、ロシアにも、スカンヂナヴィアにも（同志ヘーグルンドの代表せる有力な一派）、バルカンにも（ブルガリアの『狭心派』）、イタリアにも、イギリスにも（ブリ

テン社會黨の一部）存在してゐるし、フランスにも（ヴァイヤン自身が『ユマニテ』において、インタナショナル主義者の抗議書簡を受取つたこと）——尤もそれを完全には公表しなかつたが———（『自白した』、オランダにも（『トリブーネ』同人）見出される。これらの分子は——當初は數の上ではまだ小さなものであらうとも———合同する必要がある。そして今日忘却されてしまつてゐる革命的社會主義の教へを思ひ起さなければならぬ。萬國の労働者に對して、排外主義者と手を切つてわが革命的マルクス主義の舊來の旗幟の下に再び集まるように促がすこと——これが今日の緊急の任務である。

謂はゆる行動綱領に關する從來の協議は、今日までは多少とも完全な平和主義的綱領の聲明を誘致しただけであつた。しかしながらマルクス主義は決して平和主義でない。戦争をできるだけ急速に終らせるために闘争することは必要ではあるが、平和の叫びは××××闘争への叫びと結びつけられる場合にのみプロレタリアにとつて意義がある。謂はゆる民主主義平和なるものはそれ自體としては小ブルジョアのユトピアである。マルクス主義綱領のみが、出來事の完全且つ明瞭な説明を大衆に與へ、帝國主義の本質に對して行はるべき闘争を解明するころの、眞の行動綱領で

あつて、この綱領は、吾々の明白な且つ目的を意識せる政策に日和見主義を感染させたことが、第二インタナショナルの崩壊を誘致したものであることを大衆に語るものであり、日和見主義なし、且つ日和見主義に對抗する新インタナショナルを創造するように大衆を促がすものである。吾々が自己に對する信念も自己の目的に對する信念も失つてゐないことを證明するところの綱領、そして吾々が日和見主義と生死を賭して戦ふ意志があることを大衆に指し示すところの綱領、そういう綱領は早晚廣汎なるプロレタリア大衆の信頼を本統に吾々の方に導くであらう。

ロシア社會民主労働者黨と第三インタナショナル

ロシア社會主義労働者黨はすでに久しく黨の日和見主義者と手を切つてきた。最近の事實は、そういう分子との分離は社會主義の利益のために必要だといふ吾々の意見を尙も確證してゐる。現在社會民主主義者と愛國社會主義者との間に存する不一致は、社會民主主義者と無政府主義者との組織が分離した當時の兩者の間における不一致よりも、絶対に小さなものではないと吾々は確信する。日和見主義者モニートルは『プロシア年報』において、日和見主義者にとつてもブルジョ

アジーにとつても現在の『協同一致』（社會民主黨内の）は有利だと言つたのは全く正當である。けれどこの『協同一致』は左翼に立つてゐる分子を強要して、排外主義者の下に従はしめ、労働者が論争問題の中に針路を見出して眞に社會主義的な、本統の労働者黨をつくることを妨げるからである。吾人の確信によれば、今日の事情にあつては日和見主義者および排外主義者との分離は無條件的に必要であつて、××××の第一の義務と見做さなければならぬ。おくれれてゐる労働大衆を迅速に啓發して社會民主主義的組織に誘致するために、往年社會民主主義者が黄色派や反ユダヤ人主義者や自由主義労働者團體と離れることが必要だつたと同じように、右の分離は今日必要なのである。

第三インタナショナルは——吾人の意見によれば——取りも直さずこういふ基礎の上に形成されなければならぬ。吾々の黨にとつては、愛國社會主義者と分離することが合目的であるか否かといふ問題は存在しない、——この問題は吾々にとつては何人も否認できぬまでに解決されてゐる。たゞ吾々に取つては、そういう奇麗サッパリした分離を全インタナショナルにおいて最近の將來に希望し得るか否かといふことだけが問題となるのである。

國際的マルクス主義組織は、各國においてさういふ獨立のマルクス主義黨をそれ／＼創立する意志と用意とが現存してゐる場合にのみ、實現され得ることは明白である。最古の且つ最有力の労働者運動の國たるドイツは、この點で決定的意義を有してゐる。新しいマルクス主義インタナショナル創立のための條件が既に成熟してゐるか否かは、最近の將來が吾々に教へるであらう。

既に成熟してゐるとすれば、吾々の黨は友黨と共に、さういふ日和見主義および排外主義から淨められたインタナショナルに加盟するだらう。成熟してゐないとすれば、そのことは單にさういふ大掃除まで多少とも長期の進化をなほ関みすべきであることを立證するに外ならぬであらう。その場合は吾々の黨は舊インタナショナルの中に極度の左翼を形づくるだらう——各國において、眞のマルクス主義的土臺に立脚せる國際労働者組織の創立のための基礎が存在するようになるまで。

最近數年中に國際的闘争場において發展が如何なる形を取つて行はれるかを、吾々は知らないし、また豫見することはできぬ。しかしながら一つのことを吾々は知つてゐる、そしてその點では吾々の確信は動かすべからざるものである。曰く、わが黨はわが國において、且つわがプロレ

タリアの間に、倦むところなく上述の方向に向つて働くだらう、そしてこのマルクス主義インタナショナルのロシア支部を創立するために、日常の闘争において努力するだらう。

ロシアにおいても公然たる愛國社會主義者と『中央派』とが決して缺けてゐるわけではない。これらの人士はマルクス主義インタナショナルの創立に對して戦ふだらう。ブレハノフとジュードクムとは原則上同一の基礎に立脚してゐて、今日すでに握手しようとして構へてゐることを吾々は知つてゐる。またアクセルロッドの指導する『組織委員會』がカウツキーの政策を、ロシアの地盤に移植せんと試みてゐることをも吾々は知つてゐる。『單一』労働者黨といふ口實の下に、これらの人士はすべての日和見主義者との合同、従つてまたブルジョアジーとの合同を説教してゐる。しかしながらロシア労働者運動の過去および現在は、階級意識あるロシア労働者は依然として、わが黨と共に進軍するだらうといふことを、完全に確證してゐる。

四 分裂の歴史およびロシアにおける 社會民主主義の現状

戦争に對するロシア社會民主労働者黨の前述の戦術は、ロシアにおける社會民主主義の三十年間の發展の避くべからざる成果を示すものである。わが黨の歴史に通曉せずしては、この戦術を理解することも、わが國における社會民主主義の現状を理解することも共に不可能である。その故に茲にこの歴史の根本的事實を讀者に想起させる必要に迫られる。

ロシア社會民主黨は一八八三年に、社會民主主義理論が『労働者解放團』によつて國外において初めてロシアに適用されて、系統的に説明されるに至つた時に、思想團體として生じたものである。九〇年代の初めまでは社會民主黨はロシア労働者の大衆運動に立脚することを得ないで、依然として思想團體としてとどまつてゐた。九〇年代の初めの社會的激變、労働者間の激動とストライキ運動とが社會民主黨を、労働階級の經濟闘争とも政治闘争とも不可分に合一せる一個の能動的な政治的權力たらしめたのである。社會民主黨の『經濟主義者』と『イスクラ派』とへの

分裂も、矢張りこの時代に始まるものである。

『經濟主義者』と舊『イスクラ』(火花) 一八九四—一九〇三年

『經濟主義』はロシア社會民主黨内における一の日和見主義潮流であつた。その政治的本質は次ぎの綱領條項にとどめを刺す。『労働者は經濟闘争を、自由主義者は政治闘争を行はねばならぬ。』そしてこの主義の理論的主柱は謂はゆる『合法マルクス主義』、即ちそれぞれの革命的傾向を以て裝飾され自由主義ブルジョアジーの欲求に合致させられたる『マルクス主義』を代表するところの、謂はゆる『スツルーフ主義』であつた。ロシアにおける労働大衆の未成熟に立脚し、同時にこの『大衆』と歩調を合せて進まうといふ希望に導かれて、『經濟主義者』は労働者運動の任務と動力とを、經濟闘争と、自由主義に對する政治的支持とに局限して、自分としては獨立の政治的任務を帯びなかつた。

舊『イスクラ』(一九〇〇—一九〇三年)は革命的社會民主主義の原理の名において、『經濟主義者』との闘争を勝利的に行つた。階級意識あるプロレタリアートの全精銳は『イスクラ』の味方

についた。革命(一九〇五年)の二三年前に社会民主党は極めて至當な、非妥協的ニ革命的な綱領をかゝげた。一九〇五年の革命中における階級闘争も大衆行動も、この綱領の正常なることを確證した。『イスクラ』は大衆を導き進める能力のある労働者の前衛を養成しようとするために反して、『経済主義者』は大衆の後れてゐるのに順應した。愛國社会主義者の今日の論據(大衆を考慮に入れることの必要だとか、帝國主義の進歩的性質だとか、革命主義者の『幻想』だとかいふ)は、既に『経済主義者』が擧げてゐたものである。日和見主義的に『修正』されたマルクス主義を、ロシア社会民主党は既に二十年以前に『スツルーフ主義』の名の下に知つてゐた。

『メンセヴィズム』と『ボリセヴィズム』

ブルジョア民主主義革命の時期は社会民主党内に諸潮流の新たなる闘争をつくり出したが、これは以前の時期の直接の繼續であつた。『経済主義』が『メンセヴィズム』に轉化した、そして舊『イスクラ』の革命的戦術の固執が『ボリセヴィズム』を生んだ。一九〇五—〇七年の暴風時代には『メンセヴィズム』は、自由主義ブルジョアジーから支持されてゐるところの、そして矢張り労働者運

動内に自由主義ブルジョアの傾向を移し入れようと試みてゐるところの、一個の日和見主義的潮流であつた。一般にこの潮流の本質は労働者運動を自由主義に順應させることであつた。これに反して『ボリセヴィズム』は社会民主主義労働者の任務として、農民の民主主義分子を——自由主義者の動搖と裏切りとは反對に——×××闘争に叫合することを擧げた。そして労働大衆は、『メンセヴィキ』自身が繰返して承認したように、革命における比較的大きな行動においてはすべて『ボリセヴィキ』と行動を共にしたのである。

一九〇五年の革命はロシアにおいて非妥協的革命的な社会民主主義戦術を試練の下に置き、これを固め、深め、鍛え上げた。諸々の階級および黨の公然たる出現は、社会民主主義的日和見主義(『メンセヴィズム』)と自由主義との相互關聯を再三暴露した。

マルクス主義と解黨主義(一九〇八—一九一四年)

反革命時代(一九〇七年以後の)は再び——しかし今度は全然新しい形で——社会民主党の日和見主義的戦術か、革命的戦術か、といふ問題を當面の問題たらしめた。メンセヴィズムの主要團體は

——幾多の最上の代表者の抗議があるにも拘らず——解黨主義者の潮流をつくり出した。そしてこの解黨主義者はロシアにおける新たな革命のための闘争を抛棄し、×××組織および仕事を斥け、それに對しても、また吾々の共和制といふ綱領要求項目に對しても、嘲笑を残したゞけにすぎなかつたのである。雑誌『ナーシヤ・サーリヤ』『吾々の曙』の正式同人の集團——ポトレツフ、チェレワーニン等——からは、ロシアの自由主義ブルジョアジーから千種萬様の方法で支持され、鼓舞され、鍾愛されたところの、舊社會民主黨から獨立な一つの中心が構成され、かくして自由主義ブルジョアジーは労働者を×××闘争から絶縁させる目的を履行した。

一九一二年のロシア社會民主労働者黨の一月會議は、國外の幾多の團體および小團體の頑強な對抗にも拘らず黨を立て直したものであつて、こゝにいふ日和見主義者の集團を黨から排除してしまつた。二年以上の間（一九二年初めから一九一四年まで）兩社會民主黨派の頑強な闘争が繼續した——一九一二年一月會議で選出された中央委員會と、一月會議を認めないで黨を『ナーシヤ・サーリヤ』團體と合同して立て直さうと欲した、謂はゆる『組織委員會』との間に。同じように頑強な闘争が兩日刊労働者新聞の間にも、『プラウダ』と『ルツ』およびその追隨者の間に、ま

た第四回國會の兩社會民主黨議員團の間にも（ロシア社會民主労働者議員團——『プラウダ派』即ちマルクス主義者——と『社會民主議員團』——チヘイゼを先頭とする解黨主義者——との間に）行はれた。プラウダ派は社會民主黨の革命的傳統を擁護し、特に一九一二年に始まりつゝあつた労働者運動の飛躍を支持し、合法組織を×××と、新聞を×××と結合して、かくして階級意識ある労働者の壓倒的多数を叫出したのに引きかへ、解黨派——政治的勢力としては只一つ『ナーシヤ・サーリヤ』團體を通じて働きかけてゐた——は、主として自由主義ブルジョア的分子の八方からの支持に頼つてゐた。

兩黨の新聞に對する労働者團體の一般集金——これはこの時期のロシアの事情の下において、會費醸金の唯一の可能な形式であつた——は、『プラウダ派』（マルクス主義者）の勢力と影響とはプロレタリア的起源のものであるに引きかへ、解黨派とその組織委員會とはブルジョアの源泉から養はれてゐたことを明示した。左の簡単な表は『マルクス主義と解黨主義』といふ書物から取つたものであつて、この表は一九一四年七月二十一日の『ライプチーゲル・フォルクスツァイツング』紙にも簡単に掲載されたものである。

ペテルスブルグ新聞における集金数および集金額（一九一四年一月一日より五月十三日まで）

	プラウダ派	解黨派
集金数 金額（ルーブル）		
労働者團體より	二、八七三 一八、九三四	六七一 五、二九六
非労働者團體より	七二三 二、六五〇	四五三 六、七六〇

これによつて吾々の黨は、一九一四年には階級意識あるロシア労働者の五分の四を、革命的社會民主主義戰術の方に叫合してゐたことを知る。一九一三年全體を通じてプラウダ派における労働者團體集金数は二一八一、解黨派は六六一であつた。一九一三年一月一日から一九一四年五月十三日までについて見れば、次ぎの如き數字を得る。プラウダ派即ち吾々の黨に對しては労働者團體集金数五〇五四、解黨派に對して一三三二一（即ち二〇・八%にすぎぬ）。

マルクス主義と愛國社會主義（一九一四—一九一五年）

ヨーロッパ大戰の勃發はヨーロッパのすべての社會民主黨、從つてロシアの社會民主黨にも、黨

の戰術を世界的危機に對して吟味する可能を與へた。この戰爭の反動のおよび掠奪的性質は、他の政府におけるよりもツァーリズムにおいて一層明瞭に現はれた。それにも拘らずわが解黨派（これは吾々の黨を外にしては——自由主義と緊密な關係を保つてゐるおかげで——或る種の勢力を持してゐる唯一のものである）は、愛國社會主義に改宗した。「ナシヤ・サーリヤ」團體は合法に對する獨占權を可なり長く有してゐたために、「戰爭に對抗せず」三國（今は四國）聯合の勝利を熱望することが合目的だといふことを傍若無人に宣傳することができ、ドイツ帝國主義に「異常」な罪を嫁することができた。ブレハノフは一九〇三年以來政治的無性格を繰返へし示してきて、既にその日和見主義者の方に移つてしまつてゐるが、ロシアのブルジョア新聞の賞讃に助力されて、一層ハッキリした形でこれと同一の態度を取つた。否、彼れはツァーリズム側の戰爭を「至當」と説き、イタリアの御用新聞記者と會見してイタリアを戰爭に引入れることに力を藉すまでに徹底してゐる！

かくして解黨派に對する吾々の評價の正しかつたこと、解黨派を吾々の黨から排除したことの正しかつたことは、發展の成行きによつて確證された。今や解黨派の事實上の綱領と、彼れ等の

傾向の實際の意義とは、日和見主義であるといふ點に存するのみならず、大ロシア人の地主およびブルジョアの特権および優位の擁護を始めたといふ點に存する。それだけでももう立派な國民自由主義労働者政策である。それは急進小ブルジョアの一部分と特権労働者の極小部分とが、『自國』ブルジョアと一諸になつてプロレタリアートの大衆に對して戦ふことである。

ロシア社會民主黨の現状

既に述べたように解黨派も、幾多の國外團體（ブレハノフ、アレキシンスキー、トロツキー、その他）も、謂はゆる『民族的』團體——即ちロシアの非ロシア人社會民主主義團體（ユダヤ人の『ブンド』派、ポーランドおよびレトランド社會民主黨）——も、わが一九一二年の一月會議を認めなかつた。吾々に向つて放たれた無數の罵詈謗の中には、『篡奪』だの『分裂』だのといふ非難を一番多く聞く。そういふ攻撃に對する吾々の答へは次ぎの如きものであつた。即ち吾々は、わが黨が階級意識あるロシア労働者の五分の四を糾合したことを立證するところの、客觀的に吟味することのできる精確な數字を擧げたのである。これは反革命時代における違法的仕事の

困難を考へて見れば決して小さな成功ではない。

『ナーション・サーリヤ』團體を排除することなしに、ロシアにおいて社會民主主義戰術を基礎に合同が可能だとすれば——何故にわが多數の反對者は彼れ等の間にさういふ合同を成就し得なかつたのか？ 一九一二年以來三ヶ年半も経過してゐる、そしてこの歲月の間にわが反對者はその努力にも拘らず、吾々に對抗する一個の社會民主黨を創立することに成就しなかつた。この事實はわが黨のための最上の擁護である。

わが黨に對して戦つてきた社會民主主義諸團體の全歴史は、腐朽と瓦解との歴史である。一九一二年三月にはこれらの團體はすべて例外なしに、吾々に對する闘争において協同した。しかしその年の八月に、彼れ等が吾々に對する謂はゆる『八月聯盟』を創立したときには、既に彼れ等の間に分裂が始つてゐた。諸團體の一部は聯盟から脱退した。彼れ等は黨も中央委員會も創立することができず、たゞ『合同再建のための』組織委員會を構成してゐるだけだが、この委員會はその實はロシアにおける解黨派團體のための單なる隠れ蓑たることを立證したにすぎぬ。

一九一二年から一九一四年にかけてのロシアにおける労働者運動のすばらしい飛躍と大衆罷業

の全時期を通じて、八月聯盟全體のうち残つたのは只一つ『ナシヤ・サーリヤ』團體だけであつて、この團體は自由主義との連絡から勢力を製造しつゝ大衆の間に仕事を行つてゐた。一九一四年初めにはレトランド社會民主黨が正式に八月聯盟から脱退し（ポーランド社會民主黨は一般にこの聯盟には加入してゐなかつた）、そして聯盟の首領の一人のトロツキーは自分自身の團體を創立して、それによつて非公式に聯盟から分離してしまつた。一九一四年七月には、國際社會主義事務局執行委員會のカウツキーおよびヴァンデルヴェルドの参加の下に開かれたブリュッセル會議で、吾々に對して謂はゆるブリュッセル聯盟が創立されたが、レトランド社會民主黨はこれには加はず、ポーランド社會民主黨中の反對派は間もなく脱退した。開戦後はこの聯盟は完全に瓦解してしまつた。『ナシヤ・サーリヤ』、ブレハノフ、アレキシンスキー、それからコーカサスにおける社會民主主義指導者アンは、ドイツの敗北が望ましいと説教する公然たる愛國社會主義者になつた。組織委員會とユダヤ人『ブンド』派とは愛國社會主義者と愛國社會主義の基礎とを擁護してゐる。チヘイゼ議員團は戦費に反對投票したとはいへ（ロシアではブルジョア民主主義者——トルドウィキ——すらも戦費に反對した）、依然として『ナシヤ・サーリヤ』の忠實なる盟友であつ

た。わが極端愛國社會主義者（ブレハノフ、アレキシンスキー一味）は、この議員團に完全に同意してゐる。パリでは新聞『ナシヤ・スラヴヤ』（『吾々の言葉』——もとの『ゴロス』——）が、マルトフおよびトロツキーの主たる参加の下に創立され、國際主義のプラトンの擁護を、『ナシヤ・サーリヤ』や組織委員會やチヘイゼ議員團との協同一致の無條件的要求と結びつけようと努力してゐる。この新聞は二百五十號を發行した後に、内部的瓦解を自白することを餘議なくされてゐる。即ち編輯部の一部は吾々の黨に傾いてゐるし、マルトフは『ナシヤ・サーリヤ』を無政府主義と非難してゐるところの組織委員會に飽くまでとゞまらうと欲してゐる（丁度ドイツにおける日和見主義者、即ちダヴィッド一味、『インテルナチオナル・コレスボンデンツ』、レーギエン一味が、同志リーブクネヒトを無政府主義と非難してゐるに似てゐる）。またトロツキーは組織委員會との絶縁を宣言しながらチヘイゼ議員團と提携することを望んでゐる。チヘイゼ議員團の綱領と戦術とは、その指導者の一人が説いてゐるのを、アレキシンスキーおよびブレハノフの立場を主張する評論雑誌『ソウレミエニ・ミール』（一九一五年）第五號に讀むことができる。即ち議員チヘンケリーは記して曰く、

『ドイツ社會民主黨はドイツの參戰を阻止する能力がありながら、そうしなかつたといふ主張は、ドイツ社會民主黨がパリケードの上で斃れ、祖國が戰場でのたれ死にすべきだといふ暗黙の希望を意味するか、乃至は鼻の先にある對象を無政府主義的望遠鏡で眺めることを意味する。』*

*同誌第五號、第一四八頁。最近トロツキーは、インタナショナルにおけるチヘイゼ議員團の權威を高め、ることが自分の任務だと考へると聲明してゐる。それで今度はチヘンケリーが同じくインタナショナルにおけるトロツキーの權威を熱心に高めようとするのは疑ひを容れない。

この短かい命題の中に愛國社會主義の全本質が表現されてゐる。即ち現在の戰爭中における祖國擁護に對する原則的承認も、×××宣傳および準備に對する嘲笑——軍事檢閲に對する唯々諾々たる同意を以て——も、この文章の中に現はれてゐる。問題はドイツ社會民主黨が戰爭を阻止し得たかといふことでもなければ、一般に革命家は革命の成功に對して保證を與へ得るかといふことでもない。社會主義者として振舞ふか、それとも文字通りに帝國主義ブルジョアジーの抱擁に身を委せるかといふ點である。

わが黨の任務

社會民主主義はロシアではブルジョア民主主義革命（一九〇五年）以前に發生し、この革命と、並びに反革命とから強められ固められて身を起した。ロシアが進歩に後れてゐることは、吾々の間に小ブルジョア日和見主義の潮流および分派が異常に夥しく存在してゐる根據を成すものであつて、一方ヨーロッパのマルクス主義の影響と、開戦まで合法的社會民主主義諸團體が繼續してゐたのとで、わが教養ある自由主義者の間から、『聰明』な、『ヨーロッパ的』な（非革命的の意）、『合法的』な社會民主主義が創造された。ロシアの労働階級は日和見主義のすべての亞種との、斷乎たる三十年間の闘争を通じてのみ彼れ等の黨を建設することができた。ヨーロッパの日和見主義の悲惨な破滅をもたらし、わが國民自由主義者と愛國社會主義的解黨主義との同盟を確證したところの世界戰爭の諸經驗は、わが黨は今後もこの至當 ××× 辿らねばならぬといふ吾々の確信を一層強めてくれる。

附
錄
一

ロシア社會民主勞働者黨中央委員會宣言

(一九一四年十一月一日發表)

(『ソチアル・デモクラット』第三三號所載。)

すべての國々の政府およびブルジョア諸黨が數十年間に亘つて準備してきたところの、ヨーロッパ戰爭が勃發した。軍備擴張競争、資本主義發展の新たな帝國主義的時期において、世界市場のための鬭争が主要諸國の間に増大的に深刻化したこと、後れたるヨーロッパ諸王國の王朝的利害關係——このすべてが戰爭を誘致しなければならなかつた。このすべてが戰爭の原因となつた。國土の強奪、異民族の拘束、その富の掠奪、ロシア、ドイツ、イギリスの國內的危機から労働大衆の注意を他に轉じさせること、労働大衆を分裂させ國民主義的に欺瞞すること、プロレタリアの×××運動を弱める目的でその前衛を剿滅すること——これが現在の戰爭の唯一の實際的内容であり、意義であり、目的である。

社會民主黨の任務は、第一番にこういふ戰爭の實際の意義を發見し、支配階級即ちブルジョアジイとユンケルとによつて戰爭擁護のために弘布されてゐる虚偽、詭辯、「愛國的」言辭の假面を剝ぐことである。

一方の戦陣の先頭にはドイツのブルジョアジイが立つてゐる。彼れ等は祖國と自由と文化との擁護のために、ツァーリズムによつて抑壓されてゐる諸民族の解放のために、ツァーリズム瓦解の

ために戰爭を行ふのだと斷言して、労働大衆を欺いてゐる。實際上はユンケルおよびウィルヘルム二世の従僕たるドイツ・ブルジョアジイは、つねはツァーリズムの最も忠實なる盟友であり、ロシアにおける労働者および農民の×××運動の敵であつた。實際上はこのブルジョアジイはユンケルと協力して、ロシアにおける革命に對してツァール王制を防護するために、戰爭の結着を顧慮するところなく全力を集注するだらう。ドイツ・ブルジョアジイは南斯拉ヴ族の革命を抑壓するために、セルビアに對して侵略を開始した。またヨリ多く富める競争者を掠奪するために、ヨリ自由な國家即ちフランスおよびベルギーに主力を向けた。また防衛戰爭だのと號しながら、軍事的技術における自己の最近の進歩を利用して、フランスおよびロシアが擁してゐる軍備を凌駕するために、最も好都合な瞬間を求めてきた。

他の戦陣の先頭にはイギリスおよびフランスのブルジョアジイが立つてゐて、祖國、自由、文化のために、ドイツの軍國主義と壓制とに對して戦ふのだと斷言して、プロレタリアートその他労働的大衆を欺いてゐる。實際上は彼れらは久しい以前からヨーロッパの最も反動的な最も野蠻な、ロシア・ツァーリズムの軍隊に何億といふ金を拂つて、ドイツを攻撃させるようにしてゐた。

實際上はフランスおよびイギリスのブルジョア側側の戦争の目的は、ドイツ植民地の竊取と、産業が目ざましく發達しつゝある競争國の掠奪とである。そしてこの目的のためにこの『指導的』民主諸國は殘忍なツァーリズムを支持して、ポーランドとウクライナをも、ロシアにおける革命とも一層抑壓させてゐるのである。

強奪や戦争の殘虐および獸的罪惡については、交戰國の何れの側も甲乙がない。それにも拘らずプロレタリアートを愚弄して、『自國』並びに『外國』のブルジョア側に對するところの唯一の××××××××から注意を他に轉じさせるといふ高尚な目的のために、各國の資本は虚偽の辭を以てこの戦争の意義を誇張し、掠奪と國土の竊取のためでなく、他のすべての民衆——自國の民衆だけを別として——を解放するために敵に打ち勝つことを欲するのだと民衆に説得するにつとめてゐる。

しかしながら萬國のブルジョア側と政府とがプロレタリアートを分裂させ、内輪喧嘩をさせようとなつて努力すればするほど、またこの高尚な目的のために戒嚴状態や檢閲制度を無分別に實施すればするほど（檢閲制度は現在戦争中においてすら『外』敵よりも　を迫害してゐる）、それ

だけ階級意識あるプロレタリアートは、その連帯、その國際性、その社會主義精神をあらゆる國のブルジョア徒黨の排外主義的刺戟に對して擁護する義務が一層大きなものとなる。そうすることを抛棄するのは、階級意識あるプロレタリアートにとつては、社會主義的努力は勿論のこと自由のための民主主義的努力を抛棄することを意味することにならう。

最も深刻なる苦痛の念を以て、吾々は茲に斷言しなければならぬ、ヨーロッパ大國家の社會主義諸黨はこの任務を履行しなかつた、これらの諸黨——第一番にドイツ——の指導者の態度は専ら社會主義に對する裏切りを事としてゐると。最大の歴史的な世界的破局の瞬間に、現在の第二インターナショナル（一八八九—一九一四年）の指導者の多數は、國民主義を以て社會主義に代へようと試みてゐる。彼れ等のこゝろいふ態度のために労働者黨は××××××××の所業に反對せず、労働階級に對して政府の態度と歩調を合はせるよう勵まされてきた。第二インターナショナルの指導者は戦費を協賛したり、自國のブルジョア側の排外主義的合言葉を受賣りしたり、戦争を擁護したり、ブルジョア内閣に入つたりして社會主義の裏切りを實行してきた。ヨーロッパにおける社會主義の有力な指導者および機關紙は、今や社會主義に立脚せずして、ブルジョアの排外主義的、自由主義的

地盤に立つてゐる。社會主義に對する此くの如き汚辱の責任は、第一にインタナショナルの最も重要な最も有力な部分を代表するドイツ社會民主主義者の上にふりかゝるものである。とは言へブルジョアジーの内閣の椅子を占めてゐるフランスの社會主義者を擁護してもならぬ。このブルジョアジーこそは嘗て祖國を賣つて、ビスマルクと協力してパリ・コミューンの抑壓に従つたものであつた。

ドイツ並びにオーストリアの社會民主主義者はツァーリズムに對して戦ふといふことで以て戰爭の擁護を辯護しようとして試みてゐる。吾々ロシア社會民主主義者は、この辯護を單なる詭辯と見做すものであることを聲明する。ツァーリズムに對する×××運動は我が國では最近の年月に極めて大規模のものとなつてきてゐる。此の運動の先頭には全時代を通じてプロレタリアードが進軍してゐる。幾百万人が參加した政治的罷業は、最近の年月にツァーリズムの壊滅といふ合言葉と、民主共和制の要求との下に行はれた。開戦のすぐ前にフランス共和國大統領ポアンカレはニコラス二世を訪問せる時、ベテルスブルグ街上にロシア労働者が築いたバリケードを目撃することができた。ロシアのプロレタリアートは全人類をツァーリズムの汚辱から解放するために、如何

なる犠牲をも辭しなかつた。然るに現在の事情の下に何物かツァーリズムの生命を永引かせ、ロシア民主主義に反對する鬭争を助力することを得るとすれば、それはツァールの反動的目的のために、イギリス、フランス、ロシアのブルジョアジーの財布の口を開かせるところの、現在の戦争だと言はねばならぬ。そして何物かツァーリズムに對するロシア・プロレタリアートの×××鬭争を困難ならしむることを得るとすれば、それはロシアの排外主義新聞が手本として吾々に示してゐるところの、ドイツおよびオーストリアの社會民主主義指導者の態度である。

ドイツ社會民主黨の力が非常に不足であつて、そのために如何なる×××行動をも斷念する必要に迫られたと考へる人があるかも知れぬが、それにしてもドイツ社會民主黨はそういう場合でも排外主義者の陣營に投すべきではなかつた。そのためにイタリア社會主義者は、ドイツ社會民主黨指導者はプロレタリア・インタナショナルの旗幟を汚したと主張してゐるが當然のことである。

わがロシア社會民主労働者黨は既に大きな犠牲を拂つてきたし、また戦争に對する鬭争においても一層大きな犠牲を拂ふだらう。吾々の合法的新聞はすべて絶滅された。組合の多數は抑壓さ

進することができるのである。

すべての國のブルジョアジーの排外主義および愛國主義に對する労働者の國際的友愛に生命あれ！

日和見主義から脱却せるインタナショナルに生命あれ！

ロシア社會民主労働者黨中央委員會

『ゾチアル・デモクラット』編輯部の注意

中央委員會の提出せるヨーロッパ聯邦なる合言葉は、カウツキー等の平和主義的合言葉と言葉の上では同じではあるが、ドイツ、オーストリア、ロシアの××××××××といふ要求を伴つてゐる點でこれと意義を異にするものである。『ゾチアル・デモクラット』第四十四號は、この平和主義的合言葉には經濟的基礎づけが缺けてゐることを證明せる社説を掲げた。このカウツキー等の合言葉は世界經濟の計画的組織と、各國民間における植民地・勢力範圍等の計画的分割とを必要とするが故に、資本主義の下においては實現すべからざるものであるか、——乃至は植民地の

搾取および抑壓を増大し、急激に發達しつゝある××およびアメリカに對抗するための、大強國間の一時的同盟を意味する反動的合言葉である。

附 錄 二

ロシア社會民主労働者黨國外團體
ベルン會議決議文

（一九一五年三月二十九日、『ソチアル・デモクラット』第四〇號所載）

日和見主義と第二インターナショナルの崩壊

第二インターナショナルの崩壊は社會主義的日和見主義の崩壊である。日和見主義は過去の労働者運動の『平和的』時期の産物として發達したものである。この時期において労働階級は、議會主義その他あらゆる合法的可能の利用といふような重要な闘争手段を學んだ。また労働階級は政治的および經濟的大衆組織を形づくることを學んだり、大きな労働者新聞を起したりした。然しながら他面においてはこの時期は、階級闘争を拒否したり、社會的平和を説教したり、××××××を否認したり、××××××を原則上斥けたり、ブルジョアの愛國主義を認めたりする傾向を生んだ。労働階級の或る部分（『祖國』の植民地的利潤や世界市場における特權的地位から生ずる利益の一部にありつく労働者運動の官僚と労働貴族）は、社會主義黨の小ブルジョアの隨伴者と共に右の傾向の社會的基礎を形づくつてゐた。この諸層はプロレタリアートに對するブルジョアジーの感化の通路であつた。

日和見主義の有害な影響は、戦争中における第二インターナショナルの官認社會民主諸黨の多數派

の政策に、特に著しく現はれた。戦費に對する同意、入閣、『學國一致』政策、合法性がもはや存在してゐない時機における××組織の斷念、このすべては第二インターナショナルの最も重要な決議との完全なる絶縁と、社會主義に對する直接の裏切りとを意味するものである。

第三インターナショナル

戦争によつて惹起された危機は日和見主義の眞の性質を暴露し、プロレタリアートに對する闘争におけるブルジョアジーの直接の補助者たる役割を受持つてゐることを示した。カウツキーを先頭とする謂はゆる社會民主黨中央派は、全然日和見主義の水準に低下し、特に有害な偽善的文句で以て日和見主義を隠蔽してゐる。カウツキーはマルクス主義を帝國主義に贋造してゐる。たとへばドイツでは社會主義的立場を公然と擁護することによつてのみ、大衆に黨指導者の多數派の意志を容赦なく無視させることが可能となつたことは、經驗の示してきたところである。同時に日和見主義との斷乎たる組織上の絶縁を遂行せずして、眞の社會主義インターナショナルの再建に何等かの希望をかける者があるとすれば、それこそ有害なる幻想であらう。ロシア社會民主労働者

昭和十一年七月一日 印刷
昭和十一年七月五日 發行

譯者 檢印

11.6.28

帝國主義戰爭

定價 金壹圓五拾錢

譯者 佐野 文夫

發行者 東京市神田區美土代町四
中村 德二郎

印刷所 東京市麴町區土手三番町元
谷口 印刷所
代表者 谷口熊之助

發行所

白揚社

東京市神田區美土代町四

振替東京二五四〇〇

終

V. 1. 50